

どうしようもない僕が
ブリュンヒルデに恋を
した

のーぷらん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自他（※ただし他人とは家族に限る）ともに認める、ひきこもりで女性恐怖症である伊藤英へいとうはなぶさ。

そんなどうしようもない彼が世界最強の女性・織斑千冬に恋をしたところから物語は始まる。はたして、彼の恋は実のるのだろうか。

出会い【The name of my feeling
g i s . . .】

1

僕は女性というものが苦手だ。

初めは、小学生のころ。

近くの席の女の子が体操服の入った袋をうっかり間違えて、僕の机のフックにかけた。それをすっかり忘れていた女の子は自分の体操服がないと騒ぎ出し、あろうことか僕を体操服泥棒と決めつけてののしりだしたのだ。周りの女子も気持ち悪いものを見る目でこちらを見る。何人かのクラスメートが、「お前がこいつの机に体操服置いたのを見たぞ」と言ってくれたが、引っ込みがなくなつたのだろう、「絶対にこいつが犯人よ!」とわめく始末。その事件以降、一部の女の子は僕のことを影で「体操服泥棒」と

呼び、僕が廊下を通るたびにこそそと陰口を言う。おかげで、僕は女の子が喋っているのを見ただけで『僕の悪口を言っているんだ』と想ってしまうようになった。それに、僕のノートなどを隠したり班分けで一緒の女子は話し合いの時間でも話しかけてこない。小学生にして僕はすっかり女の子が怖くなってしまった。

だから、僕は、男子校に通うことにした。少し遠いが女の子と一緒にマシだ。電車通学になった。

だが、ほとほと僕は運が悪いらしい。入学早々、今度は満員電車でOLさんに痴漢と勘違いされた。唯一救いだったのは僕がまだ中学生だったことだろうか。「思春期にそういうことに興味を持つのは仕方がないと思うけど、犯罪だからね」と注意され、周囲から生ぬるい視線を浴びた僕は女の人まで苦手になった。

というか、女というものが嫌になった。そんなときに、僕にさらなる追い討ちをかけたのが：

I S。

僕が14歳のときだった。I S ヘインフィンニット・ストラトスと呼ばれるスーツが全世界に発表された。なんと僕と同年の少女が発明したらしい(「らしい」というのは

その子を見たことがないからだ。どうせ瓶底みたいなメガネをかけて、偉そうにしているに決まっているし、傷心の僕に女の子をテレビつけてわざわざ見る気力なんてない)。しかも隣町だと言うのだから世の中って狭いね。

その時は、そんなにすごいものを作つてすごいなあ、だとか、スーツを着ただけで宇宙まで単独で行けるって人間の進化つてどこまで進むんだろう、とかくだらないことを考えていた。

しかし。

この世紀の大発明によつて、女尊男卑の風潮が生まれてしまったのだ。

何故かという、このスーツ、宇宙まで行けるといふトンデモ発明なくせに、何とへ女性以外に使用できない」という重大な欠陥を抱えていたから。

ISはそのスペックもさることながら、現行の兵器など屑鉄に等しい強さを持つ。そのことからどこをどうしてそうなったか分からんが、へISに乗れるんだから全女性は今男性より地位が高い」といふ考えが浸透したのだ。なんてこつた。女は勝手だ。

僕は見た目弱弱しく、ただでさえ女に苦手意識がある。町に出ると、そこにつけこみやすいのか、必ずと言つていいほど「そのあなた、荷物もちね」「私と一緒にお茶しに行きなさい。あなたのおごりね」などと言われて、財布も体力もなくなる。もつと削られてなくなるのは精神力だが。

結論から言おう。僕は女が苦手なあまり、ひきこもりになった。

だって、そうなくても当然だろう？町に出るたび金づるにされて、「今忙しいんで…」と断ろうものなら、痴漢だの何だのあらぬ容疑をかけられて警備員に言いつけようとす。一昔前のヤンキーに会うようなものだ。会ったら最後、お金はとられ、お金を出さねば脅される。ただでさえ、女性トラブル（それも決してモテるとかそういう意味ではないトラブルだ）が絶えない僕には生き辛い社会になりすぎたのだ。

高校2年からひきこもって、1年の歳月がすぎた。同級生（男子校なので男子のみだ）が次々と「〇〇大学に進んだ」「〇〇会社に就職した」と報告をくれる中、僕は完全に社会人のスタートも大学生デビューもしそこねて、『このまま親のすねをかじって年をとっていくのかなあ…』と思っていた。

しかし、ついにこの年。

ISの第一回世界大会があつて日本製のISに乗った日本人女性が優勝し、日本中が熱気に包まれ、「日本の科学力は世界一チイイイイイイッ！」とネットでも騒がれていた年。

僕は親に「働かざるもの食うべからず」と言われた。

一大事である。

死活問題である。

誠心誠意社会に出ることを約束するから、せめて猶予を下さいとお願いし、まずは家の家事全てをやるということで譲歩してもらった。

すつかり昼夜逆転してアニメや漫画ばかり見ていた僕にはそれだけでもキツかったが、早起きして炊事、洗濯、掃除をしないと、本当に家を追い出される。

僕の両親は、小さいながらも人気の飲食店（いや、今風に言うとかフェか？）を営んでいて、夜には同店でバーもしているのだから三食僕が作ることになるが、舌の肥えた両親にはさんざんなことを初めは言われた。僕自身も父さんが作るご飯と比べて随分おいしくないと思つたものだ。母さんは全くご飯が作れないのだが、その他の家事に關しては厳しい。

だから、家事と料理だけは20歳になるころにはそんじよそいらの主婦や料理人に負けないくらいになつていた。

僕自身もそのころになると、料理を作ることが大変楽しくなっていたし、掃除をして部屋や店が綺麗にすることが趣味のようになっていた。店には女性客もよく来るので、決して人に見られないキッチンに閉じこもり、お客さんに出す軽食を作るようになった。21歳になると、朝にたまにデザートを作り、昼にパスタ、夜に軽食とカクテルを出すようになった。午前中はアニメや漫画鑑賞、掃除、家事、昼から料理人をする生活は充実していて面白い。

僕の腕前なら、料理人として社会に出られると親も評価してくれるようになった。：相変わらず母さんに作った料理を持って行ってもらう必要があることを除けば。

母さんと父さんは「お前がせめて注文をとって食事を自分で持つていければ…」と残念な顔をしている。年をとって、腰を痛めた父さんや一日立ち仕事はキツくなってきたという母さんには悪いが、そこは「バイトをいつか雇うよ…男の子の」と言っておいた。さらに、ため息をつかれる。

でも、いいんだ。

吹き込む風がふわりと店のカーテンを揺らし、棚に整列している年代物のお酒やワインのボトルが上品な光を放つ。夜の少し抑えた照明からでも分かるような清潔な店内。3テーブルとカウンターの6席のみの小さな店だが、閉塞感はなく、どこか家のように落ち着く。

そんな店の……キッチンと自分の部屋だけで生きていければ。

背後で「早くお嫁さんをとって、孫の顔を見せてくれんかねえ」と聞こえたが、無視した。どうせキッチンに閉じこもっている僕には出会いもあるまい。第一、男女関わらず、僕は家族以外の他人に会わないで5年ほど過ごしている。会話することもあまりないので、親とふと喋る時かすれ声や小声なのに、出会いがあつてもコミュニケーションが出来るはずもない。

そう思っていた時期もありました。

まさか、父さんと母さんが本当にバイトを雇ってくるとは。

僕は随分久しく見たことのない家族以外の他人を見た。

「今日から平日は学校終わりから夜まで、休日は昼からこちらの『はなぶさ』でお世話になります、織斑一夏です。宜しくお願いします」

開かれたキッチンの扉に、中学生くらいだろうか。織斑一夏と名乗る、男の僕から見てもモテそうだと思える顔立ちの子が立っている。折り目正しく挨拶してくれて、爽やかな笑顔をまわす少年を見て、『これはもしかしくなくても女性客が増えるな…』と暗鬱とした気分になりながら、一応こちらも重い口を開いて（精神的にも、口を開いていないので物理的な意味でもだ）挨拶をした。

「伊藤英^{いとうはなひさ}…料理担当です…よろしく…」

異常にかすれて低い声になったが、織斑くんはきちんと聞き取ったらしい。

「店名と同じ名前…ですか？」と首をかしげた。

僕はうなずいて返す。

英には、〈美しい、優れている〉という意味があり、花についている〈がく〉という意味もある。〈優れていて、花を支えるがくのように人を支えられる人間になってほしい〉という願いを込めて僕につけた名前を、両親はそのまま店の名前にもしたのだ。残念ながら僕自身は人を支えられる人間になるところか、親に支えられるようなどうしようもない人間になってしまっているが。

「店のこと、については、母さんから聞いたらしい…」

掃除以外で店に出ない僕じゃオーダーの取り方も配膳もさっぱりだから。

僕の言葉に織斑くんは「はい！」と笑って返事をしてキッチンから出て行った。

織斑くんは働き者だった。仕事もすぐ覚えたので、夜以外は僕と織斑くんが店をまわしている。父さんの友だちの五反田さん（僕も小さい頃何度か会ったことがあるらしい）：まあ、母さんが、会うたびにその眼光に泣いていたとか言っていたが）の経営している食堂で中学生になってすぐお手伝いしていたそうだが、父さんが五反田さんに僕の現状とバイトが欲しい話をしたところ、織斑くんに掛け合ってくれたそうなのだ。

「よかつたの……」と聞くと、「五反田食堂はクラスメートがたくさん来るんで、俺もちよつと恥ずかしかつたですし、こつちの方が家に近いので」と織斑くんは答えた。

僕の必要最低限の質問もきちんと理解して答えてくれるあたり、彼は人の気持ちに敏感である。

……恋愛感情以外は。

「二夏つ、来てやつたわよ！」

「鈴か。……すみません、幼馴染が騒がしくして。ちよつと行ってきますね」

キッチンの外から女の子の声が聞こえた。

鈴とは、彼いわくセカンド幼馴染（僕は分からないが世間一般では二番目の幼馴染の

ことをそう呼ぶのだろうか?)だそうで、よく店に来る。織斑くんには僕が女性が苦手だと言つてあるので会つたことはないが、話を聞く限りでは随分勝気でツンデレで…織斑くんを好きみたいだね。「私の作つた酢豚を毎日食べて」だなんて、プロポーズもされているみたいだし。

まかないで出した酢豚(店では出さないがたまには中華も作りたいたいと思つたのだ)をキッチンで向かい合つて食べながら、鈴さんの一世一代の告白のことを思い出の一環として語る織斑くんを見て『こんな鈍感な子がいるんだなあ』と感心したものだ。

「英さんの酢豚の方がおいしいんですけどね。中華屋の娘よりもおいしく作るなんて…何入れてるんだろうな…」と言いながら、じつくり酢豚を食べている彼を見て『いつか女性に刺されるんじゃない?』とも心配になつたけど。

何はともあれ、女性関係で僕にアドバイスできることはない。彼に「理想の女性は?」と聞いたら、「千冬姉…は強いし美人だなあ。でも、家事とか出来ないし…うーん、でも俺が出来るから、千冬姉、でいいのかな?」なんて言つていた。一応、理想の女性像があるのならそういう人が現れたら彼も恋愛感情に鋭くなるかもしれない。それにしても、普通アイドルとか答えるんじゃないかな? (どうせ言われても分からないけど) 織斑くんつてシスコンなのかな?

そんな織斑くんが中2になり、桜の花が散り始めたころ、5日ほど休みをとりたいたいと言ってきた。どうやら、彼のお姉さんが世界的な大会に出場するそうで応援に行きたいらしい。

僕はもちろん了承した。いや、正直織斑くんがいない間は辛いけど、母さんと父さんにオーダーは頼もう。僕はオーダー取りに行けないし、休日にしたっていい。

そう軽く思っていた僕はバカだった。

織斑くんがいない5日間が地獄だったのだ。

母さんや父さんがこの機に何とか俺をキッチンの外に出そうとすること2日間、僕がオーダーをとらざるを得なくなつて3日間。

3日目の朝に父さん、母さんが来なくて、キッチンの机に『今日は頑張れ。3日間温泉に行つて来る』というメモがあつたのだ。

僕は無言でメモを握りつぶした。

手汗をかきながら、顔にかかるほど長い前髪を留めているピンを取つた。美容院に行くのが嫌で伸ばしっぱなしなのだ。飲食店に長い髪は厳禁だし不潔と思うので留めていたが、顔を出したままでお客さんと面と向かつて話すのは不可能だと思えた。ちよつとでも、隠れていた方がいい。視線も遮れるだろうし。

開店後。

恐る恐るキッチン扉から一歩離れた所からお客さんに話しかけられたのはすごいと思う。にしても、おじさん、おばさんのお客さんはキツイ。「これまで料理作ってたコックさん？初めて見たわー」。じろじろ見ないで下さい。「キッチンから出るなんて珍しいこともあったもんだ。明日は雨が降るな、ハハハッ」。余計なお世話です。「へえ、…近所の人に言おうつと。ついにコックさんが開かずの扉から出てきたぞつてね」。開かずの扉だなんて、呼ばれていたんですか。ホラーですね。

だが、何より女性客がキツかった。僕の方を見てこそこそ話をするくらいなら、カウンター席に座らなかつたらいいのに。何を言われているか分からないことへのストレス（どうせ暗いと言ってるんだろ…）、過去のトラウマを穿り返すような行為（こそこそ話さないでつてば…）、またトラブルが起きるんじゃないかという心労（3日間何もなかったけど…）で、僕はラストの3日間に何度心の中で織斑くんを呼んだか分からない。

そして、織斑くんの休みが明ける日。

バイトは10時からだけど、僕はこの5日間で彼という存在の大切さが身をもつて分かり、朝から織斑くんに感謝の気持ちを含めて1ホールのケーキを焼いていた。まあ、急に感謝というのも変なので、すごい大会に出るといってお姉さんのお祝いという名目

だ。シスコンみたいだから喜ぶだろうなあ。しかし、何の大会かくらい聞いておけば良かった。そうしたら、ネットで結果を調べて織斑くんにすぐ連絡して「おめでどう」なり「お疲れ様」なり言つてあげたのに。

僕は他人と触れ合わずに5年生きてきたので、そういうことに気が回らないのだ。そうこう考えているうちにケーキが完成した。うん、いい出来だ。

『でも、お祝いのケーキにしちゃこぎつぱりしてるかなあ…』

小ぶりなケーキに生クリームとイチゴを乗せたが、何か足りない気がする。

僕はメロンで飾りを作ることにした。フルーツカッティングといって、ペティナイフ一本で花や文字の形にフルーツを切っていくのだ。初めてだが何とかなるだろう。

数十分後、大きすぎるメロンのバラの花と『ちふゆさん』『お疲れさま』と書いたメモンの皮を前にして困る僕がいた。

…確かに初めてにしては思いのほか上手く出来た。織斑さんとはさすがに画数が多くて書けないから、『千冬姉』と織斑くんが呼んでいた下の名前で書いて、どんな結果でもいいように『お疲れさま』と書いた…のはいいけど。

「これケーキに飾れないよ…」

ケーキよりも飾りの方が大きい。それに二つに分けて織斑くんを持って帰ってもらうとしても、メロン一玉とケーキホールはかなり荷物になるだろう。

自分の気の利かなさに呆れつつ、どうしようと悩んでいると、ドアがノックされた。しまった！もう10時か。

扉を開けるのを忘れていたから織斑くんが入れなくて困っているに違いない。

飾りは織斑くんに見せるだけにしよう。

そう決めて、ケーキの包みとメロンの飾りをカウンターに置いて、僕は慌しく扉を開けに行った。

「織斑くん、ごめん！ドア、まだあけてなか、った……」

ドアを開けると眩しい朝の光が目に入った。僕はこの光に毎日忌々しく思いながら目を隠すのだ……普段ならば。

だが、今日の朝は違った。目を隠すのも惜しい、いや、そんな動作があつたことすら忘れるほどの女性の姿が目映っていたのだ。

黒曜の瞳に、何にも染められたことのないような漆黒の髪を無造作に後ろに垂らしている。ほっそりとした白い顔には目鼻口眉がこれ以上もないほど綺麗に配列されてい

て、すらりと伸びた肢体は少々無粋なことにきつちりとした黒のスーツで包まれていた。だが、そのスーツも彼女の女性としての魅力を隠しきれていない。

わずかに釣り目で、静かな眼差しは人によつては冷たい氷をイメージさせるのかもしれないし、恐怖の対象になるのかもしれない。だが、僕にとっては眩しく強い朝日を思い起こさせ、僕の中の何かを熱くさせ、焦がした。

僕は息をつめて、ただその女性を『見る』だけで精一杯だった。

ガチヨウの雛は生まれた直後に見たものを親だと思う。

誰に教えられたわけでもなく、本能的に。

人間は生まれてすぐ泣く。泣いたことがこれまでもなくても息をするために必要だから泣く。

誰に教えられたわけでもなく、本能的に。

僕も誰に教えられた訳でもない。これまで同じ気持ちになったこともない。ただ、この女性を見た瞬間、本能的に『好きだ』と思い、これが『恋』や『愛』といわれる気持ちなのだと思った。

もつと詳しく言うと『一目惚れ』だ。

女性というものを一目見ると、苦手だ、嫌だと思っていたこの僕が。女性目の目に留まるのが怖かったこの僕が。

この人ならばずっと自分の姿を見ていて欲しいような気分……

「…………ツ!!」

そんなわけなかった。

彼女の綺麗な瞳に映る自分のみつともない真つ赤な顔を見た途端、ずっと見ていて欲しいという思いは霧散して、代わりに恥ずかしいようなむずがゆいような……とにかくあまり見ないで欲しいという思いがしたのだ。圧倒的な存在感をもって美しく、僕なんかの前に立っているなんて信じられないほど素晴らしい彼女。僕は「あさ、あさひがまぶしい、ので……」と言いつつしながら、ケーキ作りに邪魔だからと前髪を上げていたピンを急いではずして顔を隠した。

彼女はぼかんとした顔をしたが、しばらくすると気を取り直したようだ。

「……急にすま、いえ、すみません。こちらで働かせていただいている織斑一夏の姉、織斑千冬と申します。今日明日は弟がバイトに出られそうもないのでそれを伝えに伺いました」

女性にしては低い声だ。女らしくない、という人もいるかもしれないが、キンキンと耳にも心にも突き刺さるような高い声ではない彼女の声は、僕の全身に何よりも心地よく響いた。それに比べて僕はなんとたどたどしく、聞き苦しい声であったことか！これ以上、彼女……千冬さんの前で醜態をさらしたくない一心で僕は「はい」とだけ答えた。

「……………」

妙な沈黙が走る。僕は何かまずいことでも言ったのだろうか。

不安でうつむいてしまう。

千冬さんはどこか困ったように黙りこくった後に「では、…失礼します」と店のドアを閉めようとした。わずらわしい外の光や人の目や外の世界を遮ってくれるいつものドアが、今日は千冬さんと僕とを永遠に引き離す憎らしいものに見える。彼女が遠ざかる…僕は…僕は、

「何か?」

「……?」

どういう意味か分からず、千冬さんの視線をたどると、彼女が閉めようと引いたドアノブとちょうど逆側のドアノブを逆に引っ張っている僕の手があった。

何ということをしているんだ、僕は!

血が頭に上り、顔が熱くなるのが分かった。

だが、それは幸運だったかもしれない。この熱が僕を動かすエンジンになった。後か

ら思い出しても信じられないことだが、僕はその熱で蒸気した頭の下す命令のまま、錆びついたように動かない股関節を無理やり回転させ、千冬さんに歩み寄った。

「あ、あ。あの、おわたししたいものが、あるので、待つてもらえないでしょうか？」
加速した血流のポンプが心臓を急速に打ち、その音が彼女に聞こえないか心配なくらいだった。

急な鼓動で、僕の心臓は壊れてしまいそうだった。何しろ、僕はこんな感情を経験したことがない。慣らし運転にしてはこの急発進と急加速は激しすぎじゃないだろうか。彼女の「分かった」という声に僕は安堵しすぎたのだろう。それに、『ちよつと戸口で待つてもらって、ケーキだけ渡して家で食べてもらおう…』という考えがあつたせいもある。

彼女の次の行動に全く反応できなかった。

「これは…」

僕は彼女の声ではつと我に返った。

大きすぎるメロンの飾り、小さいケーキ、メロンの皮に刻んだ、お疲れ様の文字とおこがましいことに彼女の下の名前。

いつの間にか、彼女はカウンター前に立っており、それらを見つめていたのだ。

み、見られた……!!!

飾りにしては大きいメロン、それにしては小さいケーキは、気が利かないを通り越して、いつそシユールで滑稽だった。

千冬さんはただただそれらを見つめている。彼女の視線にも動じず、メロンとケーキはカウンターの上にとっかかりとあぐらをかいていた。

優しい彼女は、作った本人の前で嘲笑することも気の利かなさをなじることもしないのだ。きつとコメントに困っているのだ。その証拠に彼女は何も言わない。

「……………」

静かだった。沈黙に重さがあるとすれば僕の体はもうペしやんこになっている。実際、心の方はばきばきに折れてつぶれてるからね。…いつそ笑ってもらった方が気分が楽です、千冬さん。

僕は足元を見ながら「笑ってください……」と言った。千冬さんの顔は見えない。ただ、彼女のほうから聞こえるふつと吐かれた息に、失笑していることが予想されて、僕はますます顔が上げづらくなった。笑い声が止んでもそうしていると、店のフローリングしか見えなかった視界に黒いハイヒールが入り、窓から差し込んでいた光を遮った。

「顔を上げて、胸を張れ」

彼女の言葉は不思議だ。

何年も人の顔を見ずに猫背だった僕の背中中は自然と伸びていた。伸ばしてみると、こ

れまで気付かなかったことに色々気付く。

たとえば、彼女より僕の方が5cmほど背が高いとか。

思ったより彼女と僕の距離が近いとか。

彼女の目の下にちよつと隈が出来ているとか。

彼女が優しく微笑んでいる、とか。

「ありがとう」

背後の窓から差し込んだ光が彼女の黒髪と瞳をきらきらと照らした。実に絵になる幻想的な光景だが、彼女は現実には僕のすぐ目の前にいて、僕に笑いかけている。

僕はひきこもりだ。この店と自分の部屋にしかいない。外の世界なんて出ない、うちにももっているだけだ。気が利かなくて会話もろくに出来ない。親のすねかじりに近い僕は、自慢じゃないが手に入るお金だけでみるなら立派に生活保障金を受給できる。

そんなどうしようもない僕が彼女に恋をした。

この人に何人の人が惹かれ、傍にいたいと思つたことだろう。僕はその一人に過ぎないし、彼女にとつては取るに足らない存在かもしれないし、声をかけただけで笑いかけただけで自分に好意をもっているなんて勘違いする痛いちよりの男と思われるかもしれない。でも、——彼女を好きな僕も、その気持ちも、「僕なんか」で終わらせたくない。もう卑下したくない。他の人に譲りたくない。背筋を伸ばして傍にいたい。

「好きです」

この気持ちも胸の内にとじこめていたくないんだ。

千冬さんがほほ笑みの表情を驚きに変えて絶句している様子を見ながら、僕は返事を待つ。

もううつむかない。

千冬さん、あなたの決断をしつかり受け止めます。

1 (千冬視点)

「好きです」

私は、唾然として彼を見た。
どうして、こうなったのか…。

思わず、今日の私の行動を振り返る。

私はその日、疲れていた。

『世界最強』『ブリュンヒルデ』と呼ばれる私も人間なのだ。どうにも私の周りの人間はそれを忘れがちなようだが。

久しぶりに日本の我が家に帰った私は、早速ひっきりなしにかかる固定電話を電話線ごと切った。すでに携帯電話は折ってしまっている。外にいる報道陣や騒ぐ馬鹿どもが視界に入るのがわずらわしくてカーテンも閉めた。

「何故モンドグロツソを棄権されたのですか?!」「答えてください!」「多大なるプレッシャーに負けたという噂も」「千冬お姉様、嘘ですよね?!」「国民全員の期待を裏切って」「お久しぶりです!」と、世界大会のことなのですが」

のどがからからだった。重い足を動かしてグラスを出し、蛇口をひねって水を出す。しばらく家を空けたので妙に生温いカルキ臭のする味がしたが、気にせずごくごくと飲んだ。一夏ならば、生水は体に悪いと怒るだろう。あいつは年寄りくさいことを言うからな。

説教をしながら千冬姉はずぼらだとか、俺がお茶入れるからソファに座ってなよと言つて、私のために動くのだ。

シンクにグラスを置いて、ソファにどっかりと座った。

だが、その一夏は今ここにはいない。

政府の保護施設にいるのだ。

ドイツで行われた第二回モンドグロツソ。あの大会で一夏は誘拐された。ドイツ軍からの情報を得て、私は大会を放棄し、急いで一夏の監禁場所へと向かった。あの時の焦燥は、とても言葉では言い表せない。

一夏は私の唯一の家族だ。

その家族を狙う誰かが許せなかった。同時に私の一番弱くて危険なところを知られているのが恐ろしかった。

私だつてただの人間なのだ。

弟を大切に思う一人の姉にすぎないと。

ブリュンヒルデである私を恐れずに大切なものを奪う奴らが恐ろしかった。

一夏は無事だった。私は情報提供をしてくれたドイツ軍に、一夏の誘拐に関しての情報の秘匿を頼み、その報酬に来週から特殊部隊の教官をすることにした。これ以上、ブリュンヒルデの弱点を知られてはならない。一夏を狙わせてはならない。そう思った。

「二回目の優勝は確実だと言われていたのにも関わらず」「I Sにはもう乗らないのですか?!」「国の威信を」「織斑さん、何があつたの」「体調を崩されたとも」「他国の妨害に遭われたとも」「どうして」「何で」「一体」

そろそろ外が本格的にうるさくなってきた。出来るだけ耳に入れないように一夏の荷物を取りに部屋に上がる。

政府の保護施設にはいつまでもいさせるともりはないが、この家にはほとぼりが冷めるまでいい方がいだろう：国に帰っても誰にも労われず、非難され、私の棄権した理由を会う者会う者が気にかけて知りたがる。私の弟である一夏にも例外なくその対象なのだ。

手早く弟の着替えと携帯の充電器をバッグに入れたとき、壁にかけられているカレンダーに気が付いた。

『10時 はなぶさ バイト』…

『↑千冬姉 応援 ドイツ↓』と書かれている次の日に、そう書かれてあった。

はなぶさは一夏が勤めているバイト先で、隣町にあるカフェ・アンド・バーだ。この町で食堂を経営している五反田さんと店主の伊藤さんは昔なじみらしく、人手が足りないはなぶさの方でバイトをしないかと一夏に打診があり、去年からあいつは働いていた。確か店名と同じ名前の料理人と一夏だけで店を回していたはず…

誘拐事件にシヨックを受けている一夏がバイトを休むと連絡しているとは思えないし、あいつを匿っている施設から外部に電話をすることはそもそも不可能だろう。

固定電話をちらつと見たが、電話線をつなぎ直しても電話が鳴りっぱなしになる。携

帯はおしやかになっている。次に一夏のベッド脇の目覚まし時計を見た。9時43分。
「……」

ため息をつき、私はネクタイをきつちり締めなおした。乱暴にスーツをはたいてしわを伸ばすと、すばやく家から出る。

ドイツ軍と話している時に、『立てば軍人、座ればサムライ、歩く姿は装甲戦車』と形容されたな。私は、…特に気を張っているときだったからだと思いたいが、そのように見えるらしい。

目を向けると、報道陣もミーハーも迅速に道をあけた。……本当に戦車でも来たかと思えるような反応だな。

そういえば束も言っていた。

『ちーちゃんは一、凜としているとか、きつぱりした顔をしすぎているとかあ…そんなじよそこの凡人を近づけないオーラがあるよね！微笑んでみなよー♪ちーちゃん、微笑むととんでもないご褒美になるよ！東さんにとつちやもはや悩殺モノ（略）』
………今は『装甲戦車』だろうか『きつぱりした顔』だろうか、好都合だと思おう。私は悠々と人で出来た道を通り抜けていった。

隣町といつてもすぐだった。穴場と呼ばれるような小さな店だが、木で作られた壁からは温かい雰囲気がある。

鍵がかかっていたのでノックをした。

ノックの音が聞こえるか少し不安だったが、ばたばたと店の中で動く音がしたのでいい心配だったようだ。

「織斑くん、ごめん！ドア、まだあけてなか、った……」

慌しく扉を開けた人は、おそらく『はなぶさ』さんだろう。白い詰襟でボタンが横についているコックコートに黒いズボン。長い深緑色のロングエプロン。服装もそうだが、何よりも甘い、クリームや果物の匂いがほんのり彼からして、この人が調理をしているんだなと思わせた。ケーキを作っていたのだろうか。ピンで留められて露わになっている顔は、調理しているものと同じくらい、いわゆる甘いマスクとやらだった。だが、私を見ているその顔は驚きに染まっている。

一夏が来ると思っていたら、今最もテレビや新聞で話題になっているブリュンヒルデが戸口に立っているのだ。驚いて当然だろう。普通なら、ここで私の威圧感（こちらとしては全くその気はないのだが）に目を伏せるか、黄色い歓声（特に女子の声は耳に痛い）を上げるか、美辞麗句の連続（私がISの世界大会で優勝したあのブリュンヒルデ

と呼ばれているのだの……言われなくても知っている）がくる。

今の時期ならば、第二回モンドグロツソの話をするかもしれない。

彼は、私を見ていた。

……まだ見ている。

………それだけか？

彼が目を開けたまま寝ているのではないかと私が疑いだしたころ、ようやく彼は我に返った。ああ、驚いていただけか。では次に「かの有名なブリュンヒルデに合えるなんて光栄です」か、「何故世界大会を棄権したのですか」だとかを言う……

「あさ、あさひがまぶしい、ので……」

そう言つて彼はピンをはずした。

……意味がわからん。

予想と全く異なる、脈絡のない発言と行動。

今の私はどこからどう見ても、間抜けな顔をしているに違いない。少なくとも『きつぱりした顔』には程遠いだろう。東がこの顔を見たら、笑い転げながら「ちーちゃん、こつち向いて♪写真とるよお！」などと言う、絶対にだ。

脳内で東にアイアンクローをしながら、私は気を取り直して「…急にすま、いえ、すみません。こちらで働かせていただいている織斑一夏の姉、織斑千冬と申します。今日明日は弟がバイトに出られそうもないのでそれを伝えに伺いました」と言った。

「はこ」

ひどく困る反応だった。

一夏の欠席の理由やらを聞かれると思ったのだが、何も聞かれない。

私についても聞いてこない。

「では、…失礼します」

…まあ、いい。用は済んだのだ。

臍に落ちない言動が多い人ではあったが、それこそ私が聞くことではない。

そう思いつつ、どこかもやもやしながらドアを閉めようとすると　：ちようど逆側のドアノブを逆に引つ張っている彼の手があった。何かあるのだろうか？

「あ、あ。あの、おわたししたいものが、あるので、待つてもらえないでしょうか？」

そのとき、店に面した路地からカツカツと歩く音が聞こえた。ハイヒールの音。テンポが速いので走っているのか？もしかしたら、我が弟のバイト先の人間にインタビューでもしにきたのか？：考えすぎかもしれないが、騒ぎになつてはまずい。私は素早くドアを閉めて、彼の脇を通り抜けた。

店の中は外観から想像していた通り温かい雰囲気だった。2つの丸テーブルを通つて、その先のカウンターの上のものを見た途端、私は思わず「これは…」と声を出していた。

メロンを丸ごと一個使つた繊細にカッティングされたバラ飾り。ちようど二人用くらいの小型のケーキ。

何よりも……メロンの皮に刻まれた、お疲れ様の文字と私の名前。

私はただただそれらを見つめた。いくら見ても、その文字は揺らぐことなくあつた。初めてだった。

誰もが失望の目で私を見る中、お疲れ様と言つてくれる人はいなかった。

『ブリュンヒルデ』は私の名前ではなかった。

ああ、まずい。

『きつぱりした顔』ができなくなりそうだった。ぐじゅぐじゅになりそう。私の中で張られていた緊張の糸がこんがらがって、緩みそう。

私が眉間に力を込めて我慢していると、はなぶささんの声がかかった。

「笑ってください……」

彼は初めから私がブリュンヒルデだと気がついていたのだろう。それでもお疲れ様と言ひ、責めもせずに私の笑顔を望んでくれた。

…彼は顔を赤くして下を向いている。普段こんな気障な真似をするような柄ではないのかもしれない。不器用なやつだな…。

だから、私は何も考えず、素直に感情を出すことが出来た。

ふつと息を吐くと、少し涙と笑いが漏れる。

「ふっ……く……、ふ……」

彼は私が落ち着くまで待っていてくれた。

泣き声を聞かれた照れもあって、何だか所在無さげに背を丸めてうつむいている彼を見ると、理不尽だが腹立たしくなってきた。

私を泣かせたのだ、もつと堂々としている。

「顔を上げて、胸を張れ」

顔を上げた彼は私より5cmほど背が高い。

思ったより距離が近かった。

だが、せめてものお礼だ。束は私が微笑んだらご褒美になると言っていたからな…。

私は微笑んだ。

せめて優しく笑えていたらと思う。

背後の窓から差し込んだ光が彼の顔を照らした。前髪でほとんど隠れているが、わずかに見える澄んだ色素の薄い瞳はきらきらと輝いていた。きれいだな。

無口で不器用そうな彼が口を開くのを私は穏やかな気持ちで見ている。

彼が私に好きだと言うまでは。

……やはり、どうしてこんな……好きだと言われたのか分からない。

今日初めて会ったが、彼はいい人だと思う。

だが、これを受け、付き合ったとして私は来週からドイツへ行くのだ。決定事項だ。オーケーを言ったとして遠く離れ離れになるのは辛いに……

いや、すぐ断ればいいのにこう考えること自体おかしいのではないか？

恋なのか？

私は身近に恋をしている相手を思い出そうとした。

そうだ、あの愚弟に恋をしている小娘ども。

一夏に恋をしている篠ノ之や、もう中国に帰った鳳は何をしていただろうか？

……叩いたり蹴ったりしていたような。参考にならない。だが、あいつらは確か一夏と

「……友人ということでもいいか？」

迷いに迷って出た言葉はこれだった。

あいつらは一夏と友人でいる。

私と彼は今日初めて会ったばかりだ。まだ『恋』だの『愛』だのを語るには早い。付き合うということにもピンとこない。私も彼も、お互いを友人からスタートして、もつと知ってからでも遅くはないはずだ。

私は久々に難問の答えをやつと解けた学生のような気分になり、満足の息を吐いたの

だ
っ
た。

『友人』

そのセリフは僕の心に突き刺さった。さつきまでの威勢や熱気もまるで風船に穴を開けたように急激にしぼんでいく。

僕が言った「好きです」という言葉も彼女には届かなかつたのだ。友だちという意味で好きかと聞かれるとは。

あつ、それとも、意味を分かっているながら、僕を傷つけまいとあえて

：いや、『それでいいんだよな?』とばかりにそわそわと僕の方を見ている彼女からはそんな打算は見受けられない、ような：気がする：多分。こんなときに人とのコミュニケーションをもつととっておけば良かったと後悔する。そうしたら、千冬さんの言葉の意味も分かるだろうに。

結局、『いいえ、愛しているんです。女性として好きなんです』と思ったものの言えず、チキンな僕がひねり出した言葉は、「そう、ですね」であつた。

彼女はほつとしたように笑つたが、その後顔を曇らせる。

僕はその変化が分からず、首をひねる。

「…その、私は来週からドイツに行くのだ。…一年ほど」
「え？」

そんな。

思わず絶句してしまった。

彼女も友人になった手前、すぐさまドイツに行くだなんて言い出しにくかったのだらう。顔を曇らせたわけはそれか。

嫌だ。離れたくない。

想いも何も伝わっていない今、離れてしまえばすぐに僕のことなんて忘れてしまいうだろう。

「あの、来週までで空いている日があれば、というかひまな日がありましたら、ちよつとだけでも、そのお茶、などい、いかがですか？せつかく友だち、なので…」

僕はつかえつつかえ、必死に言葉を紡いだ。息つきもせず、まくしたてる。一刻でも早く彼女を引き留めないと遠くに行ってしまう…そんな焦燥感に駆られていた。

彼女は少し考えて、「明日の夕方からならば、空いている」と言った。

「空いているか？」

「は、はい！いい、行きたいところがありますか?!」

明日も店があるが、そんなの関係ない。店は明後日も明々後日もいつでも開店するが、千冬さんに会うのはいつでもという訳にはいかなくなるのだ。

正直母さんと父さんに女の人と会うと伝えたら「夕方からでいいの?!」「一週間くらい休む?!」とか言ってくれそうもんだし。

「そうだな…」考えている彼女に少しでも長くいてほしくて、冷えたジンジャーエールを出す。何が好きか分からなかったが、生姜のじりつとした辛さと風味、すかつとした炭酸の感じが彼女の凛とした雰囲気と合うと思った。なにより、その中にもある甘さや透明な琥珀色の綺麗さは彼女の可憐さに似ているから。

彼女がカウンター席に座ったので、いつものようにキッチン、…ではなく、思い切つてカウンターの中に立つて、ケーキを包んだ。残念ながらメロンの方は荷物になるだろうから別に包まなくてもいいよね。皿にでも置いて冷蔵庫で冷やして、後で食べようかなあ。

「それ」

顔をあげると千冬さんが僕をじつと見ていた。明日行く場所を考えているようだったので、まさかこちらを見ていると思わなかった。どぎまぎしてしまう。慌てて彼女の

指先を追うとそこにはメロンがあつた。

「包んでもらえないか？」

僕は目を瞬かせた。

「でも、これ…おもしろい、ですよ…？」

今度は彼女の方が目を瞬かせる。

「そうか？」

「メロン一玉ですし…かさばる…といいますが」

千冬さんは目をそらしながら気まづげに後ろ髪を左手ですいて、「…大丈夫だ。包んでくれ」と言った。メロン一玉は随分重いと思うが、千冬さんは優しいからな。きつとわざわざ作ってくれたと思つて持つて帰つてくれるんだろう。すごくうれしい。

僕はメロンも包んでケーキの箱と一緒に大きめの紙袋に入れた。ちよつとでも持ち運びやすくなつたらいいんだけど。いつでもメロンは捨てて行つてくれていいと思ひながら「無理しないでくださいね」と袋を手渡した。

彼女は「すまんな」と言いながら、右手で取手を掴み、左手で紙袋の底を支えて静かにカウンターに置く。その丁寧な仕草も好きだなあ。

僕が彼女のことを改めて好きだと確認していると、千冬さんはまた僕を見てためらいがちに口を開いた。

「明日の…行く場所のことだが、その、はなぶささんの希望はあるか？」
!!

千冬さんが名前を呼んでくれた…!

「なまえ…」

「…ああ、一夏が店名と同じだと話していたから。…私の名前は千冬だと知っているんだろう?」

「え、あ?!ああ、はい…!」

ちらりと紙袋の中を千冬さんは見た。メロンに『千冬さん』と書いたんだから名前は知っているでしょということか。急に下の名前を削ったことが恥ずかしくなってきた、うろたえながら返事をする。彼女はそんな僕を見ていたずらっ子のように目を細めて満足そうに笑った。

「それより、行きたい場所はあるのか? 『はなぶささん』?」
顔が赤くなる。

だが、同時にあることに気付いて顔に上った血は一瞬にして下がっていく。

僕はしばらく外に出ていない。時間にして、ざっと五年。

たくさんの人…特に女性のいる外の世界で遊び歩けばもしかしたら僕は気絶しちゃうかもしれない。わりと本気で。

「…えーと」

屋内はどうだ？

カラオケ：アニソンとキャラソンしか歌えないよ。

水族館：密閉空間にたくさんの人。勘弁してください。

同じ理由で映画も却下。

博物館とか美術館？：近くにないんだよな。

普通の店も、夜はこんな小さい店でも賑わうからなあ。

じゃあ、屋外は？

人が少ないところ…

「海、は？」

思い出すのは幼い日に行った近所の海水浴場だった。

駐車場もなく、やけに岩場も多く、夏にはくらげが大量発生する、『心折へしんせつ』
設計の海水浴場は夏場でも客が少なかった。今は特に春だし、人がいない可能性が高

い。それに海ならば、何と云うか雰囲気があつて、よく聞くデートスポット……

僕は初めて『デート』という言葉を意識した。再度顔に血が上つていく音が聞こえる。

男女が外に出るつてデート以外の何物でもないじゃないか！

「海か……いいな」

千冬さんをちらりと見ると何てことはなさげにジンジャーエールを飲んでる。僕の情けなく悩んでいる様子は見ていないようで安心したが、千冬さんは『デート』だなんて思っていないんだろうなあ。

紙ナプキンに簡単に近所の海水浴場の地図を書き、千冬さんの都合で午後3時半に集合することになった。

話し合った後、時間を見ると11時15分。

グラスに幾らかの滴がついていて、結構時間が経っているのだなと思つた。

11時半開店なので、そろそろ誰かが訪ねてきてもおかしくはないだろう。

時計を見た僕に気付いたのか、千冬さんはちよつと笑つて「そろそろお暇するか」と立ち上がった。手には大事そうに紙袋を抱えて。

「では、また明日」

誰かにまた明日と言われることなんてもう何年もないことだった。僕は「また明日」と言って彼女を見送る。

「明日…明日か…」

かみしめるように繰り返しつぶやいた後、僕はパソコンで「急ですが明日はお休みします はなぶさ」と打つために、自分の部屋に向かったのだった。

親と面と向かつて真剣な話をする機会は、人生で何回ほどあるのだろうか。

世間一般ではもつと多いかもしれないが、僕の場合は今のところ二回だ。

一回目は「家から出て行くか」と言われたとき。

あのときは、僕の生活がかかっていた。必死にこの家にもう少しいさせてもらえるように頼み込んだっけ。土下座した記憶もある。

二回目は今だ。

僕の前には喫茶店のテーブルをはさんで背筋を伸ばした母さんと父さんが座っている。かつてない緊張感がそこにはあった。腰の悪い父さんがしやんと背筋を伸ばすほどの。

沈黙を破ったのは母さんだった。

「…本当？」

僕は思わずため息をついた。

「本当だよ…何度も言ったけど、明日は人と会う約束があるんだ…だから店を閉めるね…」

また沈黙が走る。

次に父さんが口を開いた。

「…誰と？」

今度は僕が背筋を伸ばす番だった。さすがの僕でも分かる。22歳の成人男性が親に明日デートだと告げることは普通ではないと。

「お、おお織斑君と」僕は咄嗟に千冬さん以外で唯一接点のある人物の名前を出した。

「嘘だな」

だが、悲しいかな。僕の嘘はあっさりバレて否定される。「普段から会ってるじゃない」「明らかに目が泳いでいる」、ついには「ズル休みは許さんぞ」と言われる始末だ。

僕に全てを話す以外の何が出来ただろうか。

…全てを話し終えて赤くなったり青くなったりして憔悴している僕に無数にかけられたお優しい父上と母上のアドバイスと言う名の駄目だしは三時間にも及んだのだった。

翌日の午後三時。

海辺には両親にデート現場まで車で送られた男の姿があった。その男は大きなピク

ニツクバスケットを持って真新しい服を着ている。

というか、僕だった。

ピクニツクバスケットの中身には、自信がある。朝から家族会議の疲れが残る中で、しつかり下味にこだわって衣のかりかりを引き立てるために二度揚げした唐揚げ、しつとりと仕上げたポテトサラダ、時間が経つても伸びないようにオリーブを使ったトマトベースのシヨートパスタ、苦手な食べ物や飲み物が分からないので様々な種類のサンドイッチ。付け合せのレタスやブロッコリー、トマトが目にも鮮やかだ。魔法瓶に温かいコーヒーと紅茶、ペットボトルにジンジャーエールを準備。最後にデザートも用意している。やっぱり好みが分からないので数種類のケーキ。

海なのでレジャーシート、おしぼりもばっちり持ってきている。

だが、問題は外であることと服だ。

まず、今朝。

あまりに人がいるかもしれない怖さに外に出れなかった僕は警察に連行される容疑者よろしく、両親に強制的に自動車に連れ込んでもらった。予想通りシーズン・オフである海には人つ子一人いないのが唯一の救いだが、あまりに普段と違って全視界に広がる空間に目まいがしそうだ。：冗談でもなく、脳が普段より視覚から入る情報量の多さに驚いている気がする。

それに服。

外を歩かない僕はオールシーズン料理人用の服かジャージを着ている。今着ている真新しい服は早朝両親がわざわざIS学園近くの有名ショッピングモール『レゾナンス』で買ってきたらしい。「黒のテラードジャケット、白のVネックTシャツ、濃紺のジーンズ、黒いブーツが嫌いな女性はいないんだと。これを着て行きなさい」と言いながら、僕の前にそれらを差し出した両親の満面の笑みを思い出した。

テラードジャケットって何だよ…。

真新しい服はどれもそうだが、特に丈の短く仕立ててあるこのジャケットは大変着心地が悪かった。薄手でひらひらしているのに確か付いていた値札には20948円と書かれていたような…父さんや母さんの気持ちは嬉しいが、そんなに高価でびしっとした格好良い服が僕に着こなせるはずもない。むしろ着ていることが申し訳ない。

ふがいない息子でごめんなさい。

僕は内心で両親に謝りながら、バスケットにジャケットを押し込み、家から隠し持ってきた普段部屋で愛用している灰色で丈の長いカーディガンを着た。多少毛玉はたっているし、厚ぼったくてくたびれてはいるけど、さっきのよりはまだ落ち着く…

「待たせたか？」

背後から聞こえてきた声に僕は飛び上がりそうになった。

さつき時計を見たときは三時だったはずだ。約束の時間までまだ時間があるので、弁当の中身が崩れていないかとか、あとあまり変わらないだろうけど身だしなみも確認したかったんだけど……

そう思いながら、振り向いた僕は固まってしまった。

千冬さんがいた。

ここまではまだ分かる。

だが、昨日見た彼女の感じとは大分違っていた。

スーツではなく、……何と言ったらいいのだろうか。

袖や裾に繊細なレースで描かれた花が浮かび上がっている白い半そでシャツ。薄い生地で出来ていて、海からの風に任せてふわふわとなびく。シャツの下には少し濃い目の青いタンクトップを着ている。……重ね着と言うやつだ。小さな金の首飾りがゆらゆら揺れて、何とはなしに彼女の鎖骨まで見てしまい、恥ずかしくなってしまう。

うつぶくと足もとまで千冬さんがおしゃれであることが分かった。七分丈の薄いミルクティーのような色をしたズボンに、細い素足に絡みつくようなつくりの白いサンダル。

黒いスーツもまた凜としていて綺麗だったが、今日の服装は女性らしくどこか可愛らしさを感じる。

先ほどまで自然と目に入る広い空間に辟易していたが、今の僕は彼女しか見えなかった。

僕は天にも昇るような心地になった。

だが、その数瞬後、自分の格好が恥ずかしくなる。

毛玉のついたカーディガンとそのほかは真新しい服というちぐはぐなファッションで引きこもりの僕。上から下まで完璧で美しい彼女に並ぶなんて、やっぱり変だ。

恥ずかしくてもいいからテラーロードジャケットとやらを着ているべきだった…

後悔したものの、今更着替えるわけにもいかない。僕が落ち込んでいると心配げな千冬さんの声がかかった。

「はなぶささん?…かなり待たせたのか?」

あ。

顔を曇らせた彼女を見て僕はハンマーで頭を打たれたような気持ちになった。

慌てて「いえ、まったく!!」と返した後で「今日は…その、昨日と、随分感じがちがいますね」と言う。

そしてまた後悔する。『可愛いですね』と褒めようと思ったのに…

千冬さんは斜め下を向いて髪の毛を触りながら「…スーツと私服では雰囲気も違うだろう」と言った。

そういう意味じゃないです、千冬さん。

僕は勇気を振り絞って「よく、似合っています…」と言った。ただし、蚊のなくような小さい声で。

千冬さんに聞こえただろうか？それとも聞こえなかった？どちらにせよ、反応を返されるのが怖かったので「行きましよう」と砂浜の方に足を踏み出した。

一拍おいて後ろから砂の上を歩く音がする。

その日の海は穏やかだった。寄せては返す波の規則的な音がドキドキと高鳴る胸の鼓動を鎮めてくれる気がした。

「お昼、食べられましたか…？」

「…忙しくてあまり」

僕は振り返ってバスケットを掲げた。

「あの、軽食を作って来たので…海、見ながら、食べませんか？」

千冬さんはピクニックバスケットの存在に初めて気づいたように目を瞬かせると、「ありがたかったです」と微笑んだ。

軽食を食べながら僕らは話をした。とはいっても、盛り上がったとか、ずっとしや

べっていたという訳ではない。ぼつりぼつりと話し、会話が途切れたら波の音に耳を澄ましたり空や海を見たりご飯をつまんだりしたただけだ。

沈黙が走つても気まぜくはなかったが、千冬さんを意識してそわそわしてしまうので僕にしてはかなり話したと思う。

一時間半は経つただろうか。

僕は、ずっと胸にひっかかっていることを聞くことにした。

それは、千冬さんがドイツに行ったら本当に一年間ずっと帰つてこれないのかということだった。喉がからからになったので、その場にあつたコーヒーで口の中を湿らせて尋ねる。

「ドイツ……で、何をするんですか……？」

僕は今日何度目か分からない後悔をした。

聞くのが怖かったのは確かだが、自分がちゃんと質問も出来ないくらい臆病なんて情けなかった。

「……ああ、教師だな」

「何の教師ですか？」

「機械関係、かな」

また少し沈黙が落ちた。

千冬さんはすつとレジャーシートから立ち上がって、海辺に向かう。

海風に彼女の黒い髪がはためいた。

太陽は傾き始め、薄暗く少し肌寒い。これでは薄着の千冬さんも寒いだろう。

何か上にかけられるもの……

「…」

僕はバスケットを開けてテーラードジャケットを取り出した。今日の彼女の格好に合わないかもしれないが、風邪をひいてはことだ。

ジャケットを渡しに歩み寄る。

大粒の砂ばかりある浜を歩くとざくざく大きな音が鳴った。

千冬さんが気付かない訳ないのだが、彼女はそれでも僕が声をかけるまで海——さらしにその向こうを睨むように立っていた。寄ってくる波が彼女のすぐ足もとまで迫っている。

僕はすぐ隣まで行くと声をかけた。

「千冬さん、寒くなってきたでしょう…どうぞ」

「ああ、…」

彼女は僕の方を見て、手を差し出した。その手の上に上着を置く。

ひらりと軽いジャケットだが、何だか今の千冬さんは儂げで、それを置くのもためら

われるほどだった。

「はなぶさつてどう書くんだ」

唐突に千冬さんが口を開いた。

疑問に思いながらも、しゃがんで近くにあつた短い木の枝で砂浜に『英』と書く。普段字を書くことがないし、木の枝は長い間海を漂っていたのだろう、中身がすすかですきづらかつた。

「下手だな…何と書いたんだ？」

「…英語の英だよ」

思わずすねてしまった。ほぼ同時に波が僕の字を消す。波の音で子どもっぽい反論が聞かれなかつたらいいんだけど。

「『書き直せ』だとさ」

顔を上げると千冬さんがくすくすと笑っていた。

「あと、私は『教師』になるが、英の教師じゃない。さつきみたいに敬語は使わなくていいんだぞ？」

どうやら聞かれていたらしい。

それに、さらつと呼び捨てされた。

可愛らしい笑いと名前呼びに心臓が耳元にあるのではないかと思えるほど、ドキドキ

という音が聞こえる。

本当に千冬さんはずるいよ。

僕ばかり振り回されているようで悔しかったので、思い切つて僕も名前で呼んでやろうと思つた。

「じゃあ、ちふゆ……つて書いてみて、よ」

……予想以上に照れくさく、お茶を濁してしまつた。

どぎまぎしている僕を尻目に、彼女は僕の手から枝を受け取ると、同じようにしやがみこんですらすらと自分の名前を書いた。

千冬

達筆だ。

さらに悔しくなつて、近くどころがつている菓子パンの袋に描かれているキャラクターを指先で描いてみる。

大きな丸い目に二本の耳、じぐざぐのしっぽにネズミとは思えないほど愛らしい体軀。

ピカチュウ●。

絵ならうまいんだよ？

千冬さんは感心したように笑つたが、すぐさま言つた。

「懐かしいな。でも目が大きすぎじゃないのか」

「こういう絵は目が大きい方がかわいい、んだよ…少女マンガだつて顔の三分の一くらい目でしょ?」

「そうか?」

そうこう言っているうちにまた波がきた。ちようど顔半分が消え失せる。

「やっぱり『書き直せ』だとき」

「こらえきれないというようにまた千冬さんは笑つた。

僕は無言で千冬さんに枝を渡す。

「え?」

「今度は、千冬、が描いてみてよ」

彼女は非常に困つた顔をして、パンの袋を睨みつけるように見ながら某電気ネズミを描いていく。

ちよつと後悔した。

非常に写実的でピカソの再来を思わせる力強さ。

極度に抽象的で、愛らしさはなくどこか不安になるような非対称性。

思わず見ずにはいられない圧倒的な存在感。

「……………」

僕らは無言で絵を見つめた。

沈黙が落ちる中、静かに波が砂浜の絵をかきつけた。ご丁寧已全部。

「……………ボツだつてさ」

横を見ると眉間に縦じわが入るほど、盛大にすねた顔をしていた。

今度は僕が笑う番だった。

彼女の凜とした顔、きれいな顔、色々好きな顔はあるけど、今のように子どもっぽい顔は初めて見た。その顔も好きだ。

「ありがとう」

気がつくと、ぼつりと言葉が出ていた。

千冬さんはよく分からないという顔をしている。

「今日だけでも…いちにちだけでも、…色んな顔が見れて、思い出も、出来た。また…一年後でもいいから、会って…ください」

彼女は笑った。儂くなんかない、沈み落ちる夕日が地上に最後に見せるような強い強い笑顔だった。

「二年も待つ必要ないさ。心配をかける愚弟は日本にいるし、…また会いに来る。それに、ほら」

彼女はちよこんと僕のかけたジャケットをつまんだ。

「これだつてすぐ返しに来るさ」

彼女はすごい。

僕の不安も恐れもすぐに吹き飛ばしてしまふのだから。

僕はもう一度「ありがとう」と口の中でつぶやいた。

2 (千冬視点)

「一夏」

「おかえり、千冬姉！電話持ってる？」

私がドアを開けるなり、一夏が駆け寄ってきた。

ここは、日本政府が保護施設として紹介してきたマンションの一室だ。ロビーのセキリティはしっかりしており、何よりこの階に来るまですれ違った人間は一般人ではないと感じられた。おそらく、住人を含めてこのマンション全体が一夏を守るために働く巨大な要塞なのだ。その中に外部との連絡機能がないのは当たり前だろう。保護している者の居場所が漏えいするのは好ましくない。

「今日バイトあるんだけど、ここ電話なくって…英さんに連絡できないんだ」

肩を落とす一夏に、「心配するな。はなぶささんにはお前がしばらく休むと伝えておいた」と言いながら、私は大きい紙袋から白い箱を取り出した。そつとその箱を開いて中身を確認する。

良かった。

そこにはまだ誰にも踏まれていない雪原のように真っ白で美しい生クリームと目に

鮮やかな紅い苺のショートケーキがあった。二人用のケーキは小さく華奢でクリームも見ただけで分かるほどなめらかであったので、持ち帰る途中でぐちゃぐちゃになってしまいそうだと心配していたが、崩れていなくて安心して安心する。

「このケーキは？」

「…はなぶささんからもらったんだ」

一夏は「…英さん、女性が苦手だったような？」などと不思議そうにつぶやいたが、すぐさま皿とフォークをお盆に入れ、コーヒーマーカーの電気をつけるなどいそいそと動く。

相変わらず甲斐甲斐しいな。それよりも、はなぶささん…女性が苦手だったのか？そんな素振りは…

「…」

『好きです』と言ったときのこちらを静かに見つめる彼の眼差しを思い出してしまい、じつとしていられなくなった私は一夏から皿とフォークを受け取って机に並べ始めた。

二人分の皿とフォークはすぐ置き終わり、まだ何かすることはないかと一夏の方を振り向くとぼつちり目が合う。

「どうした？」

「いや…千冬姉が家事をするのって珍しいなあと思って」

失礼な奴だ。

一夏の頭に私は勢いよく荷物を置いた。うめき声が聞こえたが気にしない。

「ふん。お前の荷物だ。携帯と着替え、携帯電話の充電器、勉強道具があれば十分だろう」

「生活には十分だけど……」

荷物の下から一夏が抗議している。私は無視をしようとして、……あることに気付いて口を開いた。

「—— 仕方がない。明日の午後娯楽品も取りに行つてやる」

一夏は口をぼかんと開けた。

「千冬姉……今日何かあった？」

「何もないさ。コーヒーが出来たら呼んでくれ」

私はメロンの入った紙袋と自分の荷物を持って自分にあてがわれた部屋の方へ向かった。冷蔵庫に入れようものなら必ず一夏の目に入るだろう。台所は一夏のテリトリだ。

はなぶささんの贈り物を見られると、ひどく気恥ずかしい。それに明日の午後はなぶささんに会うと言うのも。

元々明日は朝のみ仕事（一夏のことについて政府高官と話したりドイツ軍と契約をし

なければいけない)で午後は家にいると言っていたので、仕事は午後外出することの言い訳には使えない。だから、一夏の私物を取りに行くという理由はちようど良かった。

しかし、男女二人で出歩くというのは、『デート』か？

東が白騎士を作ったとき、私たちは二人とも14歳だった。そこからISの操縦者として最前線で活動してきた。だから、学生時代はほとんど異性に関わったことがない。かと言つて、異性と驚くほど交流のある一夏がうらやましいとは思えないが。

何はともあれ、女性中心のIS業界に身を置き、いつの間にか世界最強のブリュンヒルデとなつて男性には敬遠されていた私にとつては、このようなことは初めてなのだ。

荷物が重くなるだろうと、せっかく作つてくれたものも見せるだけで処分しようとした。私へブリュンヒルデにとつては軽いものなのに女性扱いをしてくれた。今世間で騒がれている私の為に、人があまり来ない海を選んできた。なかなか人通りの少ない場所が思い浮かばなくて悩んでいたようだが必死に考えてくれた。開店ギリギリまで私の為に時間を取ってくれた。はつきり『好きです』と言ってくれた。付き合うとまでいなくても友人としてゆっくり関係を進めることに同意してくれた。

そういう優しさや気遣いは初めてなのだ。

IS操縦以外で特に出来ることはないが、せめて彼が私を誘つて後悔するということがないようにしたい。

クローゼットの中に並んでいる黒のスーツ、動きやすいジャージ、ラフな部屋着、黒っぽい外出着を見た。

：デートには似つかわしくない、と思う。

一夏が「コーヒー出来たよ」と呼んでいる声に答えながら、私は頭の中で明日のスケジュール帳に『買い物』を追加したのだった。

翌日の昼。

午前中の予定は滞りなく終わり、昼食を食べずに私はレゾナンスに直行していた。

ここはこの辺りでは最も大きいショッピングモールだ。この世にはこんなに様々なファッション関係の店があつたのか、と思わず嘆息してしまうほど右を見ても左を見ても上を見ても店がある。女の子たちは金魚の尾びれのように色とりどりのスカートを探らめかせながら店の間をすいすいと歩いている。

さてどうしたものか、と考えていると、二人組の一夏くらいの年の女の子の会話が耳に入った。

「デートにはしつかり気合い入れて選ばなくちゃねー」

「似合わない服を着て行ったら彼氏に一発で嫌われちゃうもん！」

「ほかのこと全部百点でも服がかわいくなかったら致命的だもんねー」

……第一、彼氏ではない。

いや、そういうのではないんだ。…だが、彼女たちも『デート』というシチュエーションでは服が重要だと言っている。

『かわいい服』『似合う服』を探せばいいんだな。そう思いながら、時計を見ると、13時15分を指していた。

間に合うか？

「織斑先生！」

振り返ると、そこには大きいメガネに深緑色の髪の少女といっても差し支えない女性があった。相変わらず私と二歳違いと思えないほどの童顔だな。

「…真耶か」

山田真耶。

将来の日本代表を探すため、現役日本代表の私が候補生の指導をしたことがあった。

その中でも一、二を争う実力者であったのが彼女だ。日本代表ではなく、IS学園の教師となることにしたと彼女から手紙があつたのがつい最近。以前指導をした名残で相変わらず私を『織斑先生』と呼んでいるのが微笑ましい。彼女が何か物言いたげな顔をしているのを見て私はにやりという笑みを作りながらすかさず尋ねた。

「今は真耶も先生だろう? 『山田先生』と呼んだ方がいいか?」

彼女は顔を赤らめてぶんぶんと首を振ると身に着けている白いチュニックがふわりと広がった。内側に来ていいる淡いレモンイエローのキャミソールが彼女の雰囲気とぴったりあっている。

「『真耶』って呼んで下さい!」

「そうか。…その服はかわいいな。よく似合っている」

『かわいい服』『似合う服』。

あまりに今探している条件と重なっているので思わず感想をもらすと、真耶は今度はこそ真つ赤になった。

「…すぐその服屋さんで買ったんです! お気に入りの店で今日も見に行こうかと…せつかくですし、先生も一緒に行きませんか?」

当初会つたときのおどおどするばかりだった彼女を思い出す。成長したな、と多少年寄りくさいことを考えながら私は頷いて彼女の後についていった。

『かわいい服』のある店で『似合う服』を見つけられる真耶と一緒ならば、あっさりと今日の日も服も見つけられるだろう。

40分後。

私は自分の考えが浅かったことを痛感していた。

ISバトルでもこれくらい戦ったことはある（複数でおまけに各国の代表だった。：私を何だと思っているのだろうか）が、それ以上に私は疲れていた。

とはいえ、私のやることといったら、この試着室の中で真耶の持つてくる服を手早く着るだけなのだが。

「この手のタイプの服は着たことがないんだが、：少し、気になってな」と言ってしまうあたりだ。真耶が「織斑先生の初めて：頑張らなくちゃ：」などとつぶやいて妙にぎらぎらした目をし始めたのは。はて、当初会ったときのおどおどするばかりだった彼女は一体どこ…

「先生！」

試着室のカーテンが開いて私は振り向いた。

「やっぱりお似合いです！これも着けてください！」

真耶が差し出してきたのは、短めの金の鎖の先に小さなハートと透明な石のついた

ネックレスだ。私が髪の毛をかきあげてつけている間、真耶はほうつとため息をつきながら服の解説をしている。

「先生はいつも黒いものばかり着ておられましたけど白も似合います。トップスのスカラップ刺繍がまた春らしくてかわいいですよね！フラワー柄が浮かび上がる総レースで今年らしいリラックスメイク感を誘うショート丈は少し甘すぎるので、ゆったりめなシルエットで甘さをセーブしてみたのですがどうでしょうか？キャミソールのインナー付きなので使いやすいやすさもあると思うのですが…。ベースが白っぽいので、キャミソールとベルト代わりのスカーフの青を差し色にしました。それに、七分のサブリーナパンツにサンドルのアンクルストラップが特に足首の美しさを出しています！」

……真耶、横で店員が口を出す暇がなくて困っているぞ。あと、言っていることがちよつとよく分かん。

だが、彼女と店員のキラキラした顔や話を聞く限り『かわいい服』『似合う服』という点は少なくともクリアしたはずだ。買おう。…断じて疲れたからではない。

お礼とこのままこの服を着ていくことを伝えて真耶と別れようとしたとき、彼女は携帯電話をカバンから出した。

「先生！よろしければ、連絡先教えていただけませんか？」

「…悪い。携帯電話が壊れてしまつてな…今持つていないんだ」

ひっきりなしに鳴り続ける電話がうるさくて折ってしまったことを思い出した。真耶は残念そうな顔をしたが、IS学園の名刺を取り出すとテキパキとそこに携帯電話のアドレスと番号を書いて差し出してきた。

「成長したんだな…」

今度こそ口に出してしまった。

「織斑先生ったら」

彼女は笑った。大人びて、それでいてかわいらしい。

何故か彼女のことをうらやましいと感じながら、私は「じゃあな」とその場を去った。

時間は14時過ぎ。

今から行けば十分約束の時間に間に合う。

…はなぶささんはこの格好を見てどう思うだろうな。

3 (千冬視点)

海辺はがらんとしていた。

波が打ち寄せる音までもが静かに聞こえる。定期的な聞こえるザザーツという音がどこか浮き足立っていた私を落ち着かせた。胎児が胎内で聞く血液の音に似ているので、波の音を聞かせると赤子は落ち着くと言うが、それは今の私にも効果があったようだ。少し肌寒いくらいの海風が吹いた。

…ここは違うな。いつも私が置かれる場所とは。

人の声が聞こえない。

私を中心となつて行動しなければいけないという責任も義務も、なにもない。

それらが乱雑に積みこまれて換気していかない部屋のように息苦しかったのに、海風が私に吹き付けた途端、あつさりと体の中から抜けていく気がした。

清々しい。

時計をのんびり見ると、三時を少しばかり過ぎているが、約束の時間には十分間に合っている時間帯である。

石の階段を降りて砂浜に足をつけようとしたりと、はなぶささんの後ろ姿をすぐに見つけた。…海辺にははなぶささん以外いなかったから、すぐに目についたのだ。決して彼の姿に反射的に目がいった、などでは…

私は少し息をついた。一体何の得があつてこんな益のない言い訳をしているのだろうか。

ごまかす必要もないのだから、はつきり認めてしまえばいいのだ。私は彼に…好感をもっている。恋や愛の形になるかは予想できないが、こんなに私の心に近づいた異性は彼以外にいなかったことは確かだ。

くすぐつたい気持ちになるが、悪くはない。

だが、同時にこれから先のことを思うと不安になる。

彼は友人からでもいいと言つてくれたが、彼がいつまでこの私を好きでいてくれるかなんて、それこそISのハイパーセンサーの処理能力を駆使したとしても分からないからだ。好意を疑いたくはないが、昨日初めて会い、一年離れる女に愛情を続けてもつていられるのか？

なにより。

私自身、本当に彼を愛せるのだろうか？

私は今弱つていて疲れている。だから、優しさや癒しを兼ね備えている彼に気持ち

いつてしまうのは、乾ききった砂漠で水を求めるくらい当然のことに思えた。(…そういう意味では今回のドイツ行きはベストなのかもしれない。)

日本にいるときの批判や混乱から逃れる。そうすれば、私は回復出来て、彼との今後をしつかり冷静に考えることができるはずだ。彼の気持ちが移ろわないかも…確かめることが出来る。

ひどく自分がずるく冷たい女に思えてきて私は考えるのを止め、彼に声をかけた。

「待たせたか？」

彼はぼつとこちらを見て、そして固まった。

デジャヴだな…初めて私が店を訪ねたときもこんな反応だった。

じつとこちらを見ているだけ。

「……………」

昨日のパリッとしたコックコートとは違い、普段から着ているようなゆつたりとした灰色のカーディガンを着ている彼に見られていると、さつき急に服を買ってきた自分が恥ずかしく思えてくる。

(気合を入れすぎ、か…?)

「はなぶささん?…かなり待たせたのか?」

約束の時間より30分早いので聞く必要もないとは思ったが、とりあえずこれ以上見

つめないでいて欲しかった。

はなぶささんははつとしたように「いえ、まったく!!」と返した後で「今日は…その、昨日と、随分感じがちがいますね」と言った。

そ、そんなにコメントしづらいのだろうか。

まだこちらを見ている彼に耐えられなくなった私は「…スーツと私服では雰囲気も違うだろう」と言いながら海風で乱れた髪を直すふりをして目をそらした。

こんなとき、世の女性なら…例えば麻耶なら。「これ、似合いますか?」とあの天真爛漫な笑顔で聞けるだろう。

そんなの、出来る気がしない。

ため息をつきそうな気分だった。こんなことでよくよくよして聞きたいことを聞けな
いだなんて、やはり疲れているのだ。

「よく、似合っています…」

「!」

波の音に消え入ってしまったような声にはつと顔を上げた。

聞き間違いかと思えるような小さい声に、彼の顔を見て確認しようと思ったが、彼はすでに海のほうを向いて歩き始めている。

「行きましよう」

海風が吹いて彼の長めの髪を揺らした。

女性にも負けないさらさらの髪が舞い上がる。

その瞬間私は笑いそうになった。風に吹かれて普段隠れている耳先が真っ赤になっているのが見えたからだ。

(服を買って置いて、良かった)

ついさっきまでの後悔をあつさり忘れて、私ははなぶささんの赤い耳を見ながら朗らかな心地で砂の上を歩いた。

すると、彼は前を向いたまま「お昼、食べられましたか……？」と聞いてきた。

そういえば、服を買ってすぐこちらに来たから食べていなかったな。だが、ご飯を全く食べていないというのも変だろう。

「……忙しくてあまり」と私が言うのと、はなぶささんはやつとこちらを見た。大きなバスケットを急に出されて、思わず目を瞬かせる。

「あの、軽食を作って来たので……海、見ながら、食べませんか？」

はにかむ彼に、空腹を急に訴えだす体。

笑いながら私は「ありがたかったです」と返した。

数分後、マリンプルーのレジヤースhirtの上で、男性が作った豪華な『軽食』を目の前に固まる無骨な女の姿があった。というか、私だった。

弁当は冷たくて味気ない気がして元々そんなに好きではないのだが、このお弁当は製作者と同じく温かいような感じがした。

香ばしい匂いのする唐揚げ、しっとりとしたポテトサラダ、鮮やかな赤のパスタ。サンドイッチは中身が全て違っており、手間をかけていることがうかがえる。付け合せのレタスやブロッコリー、トマトでさえも瑞々しく、採りたてのような光を放っている。

湯気を立てるコーヒートおしほりを渡されながら、私は感心を通り越して、何故か敗北感のようなものを味わっていた。

「……料理、うまいのだな」

と言うと、軽く首をひねりながら「普段から料理、作ってますから」と事もなげげに返される。

確かにそれはそうだ。

彼は喫茶『はなぶさ』で料理を作っている。

料理人に料理で負けても何も恥じることはないだろう。

……ただ、海に行くというのにレジヤースhirtや飲み物1つ持つてくることを思いつかなかった私に対して、この至れり尽くせりの気遣い。

『千冬姉はずぼらだなあ。家事も掃除もしなくていいから、そこ座つてなよ』と言いつつたデリカシー皆無の愚弟を思い出してしまい、心の中でアイアンクローをかましながらかどうか、食べてください」という彼の言葉に甘えてサンドイッチに口をつけた。

…おいしい。

厚めのベーコンからじゅわつと油が出るが、即座にそれをレタスの瑞々しさとトマトの酸味があつさりとしたものに変える。さつと体内に入ったそれらに入れ替わり、もう一口と強請るようにじわつと唾液が出る。

私は無言で一氣に半分ほど食べて、ようやく我に返つた。

普通作つてくれたものに対して感想を言うだろう！

さぞやあきれているに違いないと思つて顔を上げると、そこには何よりも愛おしいものを見るようにこちらを見ているはなぶささんの顔があつた。

「……おいしいな」

ありきたりの言葉だが、心からの賛辞だつた。

いかにお腹がすいていたからとは言え、一応私はブリュンヒルデだ。様々な接待をされておき、最高級といわれるランチやディナーを振舞われたことも少なくない。その私がかつてと遜色がないと思うくらい、おいしかったのだ。

「あ、ありがとうございます…」

彼の頬や耳がぼおつと赤くなるのを今度は正面から見ながら、あの愛しいような視線を思い出す……こちらも顔が赤くなっているにちがいない。

そこから私たちは他愛のない話をした。ゆつくり彼の作った『軽食』（これはあくまで謙遜して彼が言ったことで、私にとつては『豪華ランチ』だつた）をつまみながらの会話は、ひどく楽しく、それでいて癒されるものであつた。

（料理も上手で、家事も出来る……彼は『そこそこ』と言つたが謙遜だろうな。それに一緒にいて楽しくて、顔も良い）

一夏を思い出した。

あいつも似たような特技を持っているがはなぶささん程ではない。それでも、あれだけモテる。うっかり気を抜くと惚れてしまうと周囲の女が言うくらい。

（じゃあ、はなぶささんは、）

一夏が昨日「英さんは女性が苦手だ」と言っていたが、それは過度に女性に好かれすぎたゆえのことではないだろうか。一夏の隣を同級生の女子が取り合う場面を思い出し、思わず一夏をはなぶささんに代えて想像してしまつた。今日着ている灰色のカーディガンがか弱い女子の手で引つ張られ、眦を困つたように下げる彼。

急に胃のあたりが苦しくなつた。

ゆつくり食べていたのでこんなに突然苦しくなるわけがない。

(ああ、これが、嫉妬か)

何ともなしにその苦しみに嫉妬という名前をつけた私は、そう思った自分に茫然とした。

これまで『嫉妬』なんて感じたことがなかった私が？

想像上の人物に？

ありえない。

元凶の彼が目を細めてコーヒ―を飲んでいるのを見ながら私は動揺を押さえられなかった。

「ドイツ……で、何をするんですか……？」

唐突に彼が尋ねてきた。

IS操縦の腕を買われてドイツ特殊部隊の教官になる。

……とはつきり言うことは出来なかった。

日本人IS操縦者がその技術を他国に教えると明言することも体裁が悪いが、何より先ほどの想像でのか弱い女子の腕がちらちらと脳裏を横切っていたから。

「……ああ、教師だな。機械関係、の」

一夏を守るために強くあるのは当然だし、誇らしいことだったが、何故私はそれを示すことを恥じているのだろうか。

あえて遠回しにドイツでISの指導をしようとってしまったことが気まずくなり、私は波打ち際に向かった。

静かに聞こえていたはずの波音が異常に大きく聞こえた。

この海の内こうにドイツがある。

行くと決めたのは自分自身なのに、離れた方がいいと思っていたのに、…その間に彼の心が離れるかもしれない、か弱い手を彼が選んでしまうかもしれないと気付くと、恨めしく思えてならなかった。

(どこまで依存しているのだ…)

自分が思っている以上に私は弱っているらしい。

自嘲していると、はなぶささんが隣まで来て上着を渡してくれた。黒いジャケットは少し大きめで私の身をすっぽりくるむ。少し肌寒く感じていたのでちょうど良い。

どこまでも気が遣えて優しく丁寧に扱ってくれる人。

ただ、今はその気遣いや丁寧さが私たちの距離を遠くしているように思えた。

「はなぶささってどう書くんだ」

言った途端、ちよつと後悔をした。

本当は私から距離をもつと詰めようと、『はなぶさ』と呼び捨てにするつもりだったのに…お茶を濁すような言い方をしてしまった。

はなぶさ、は、また不思議そうにしながらも、近くにあつた短い木の枝で砂浜に字を書く。

……読めない。

「下手だな……何と書いたんだ？」

「……英語の英だよ」

ほかんとしてしまった。いつも大人で細やかに気を配る彼が初めて見せた、すねている言葉と顔が嬉しい。声も小さくして、すねている顔もうつむいて見えないようにしているようだが、ブリュンヒルデの観察眼をなめるなよ？

ちようどよく波が来て字を消したとなれば笑わざるを得なかった。

「『書き直せ』だとさ」

まだ不満の色が残る顔で英がこちらを見上げてきた。いたずら心が湧くな。

「あと、私は『教師』になるが、英の教師じゃない。さつきみたいに敬語は使わなくていいんだぞ？」

英は目を瞠つたが、すぐ顔を赤くした。字が下手なことを指摘されてすねたことを気付かれてばつが悪そうな顔だ。けれども、「じゃあ、ちふゆって書いてみてよ」と敬語抜きで話す彼は前よりずっと自然体に見えた。

英から受け取った木の枝は長い間海中を漂流していたのか、中身がすかすかで書きに

くかったが、そこはサイン慣れした私だからな。

さつきまで『英』（本人が言うなら多分そう書いたのだろう…本当に読めなかったが）と書いてあつた砂の近くに『千冬』と名前を書く。

そこからしばらく二人で絵を描いた。子どもの頃に戻つたみたいだった。無邪気に素直に心から一つ一つを楽しんでいると思う。

英から借りたジャケツトが地面につかないように注意していると、英がぽつりと「ありがとう」と言った。

…よく分からないんだが。

私のそういう雰囲気を感じ取つたのか、英は言葉が続けた。

「今日だけでも…いちにちだけでも、…色んな顔が見れて、思い出も、出来た。また…1年後でいいから、会つて…ください」

「……」

彼は1年後も私に会う気なのか。

彼の心が1年後も同じかどうかなんて、確証はないけど、少なくとも今の彼は1年後も変わらず会いたいと思つているのか。

それまで1年後の心変わりを不安に思つていたが、彼を前にして疑うことなどできなかつた。それに。

「一年も待つ必要ないさ。心配をかける愚弟は日本にいるし、…また会いに来る」
そう。ドイツで疲れを取りながら、たまに会いに来ればいい。

私のことを忘れないように。

「それにほら、これだつてすぐ返しに来るさ」

私も今日の楽しい思い出を、彼の表情を忘れないように。

夕焼けの中、また小さく「ありがとう」と言う英に笑顔を向けながら私は初めて1年後を前向きに考えることが出来たのだった。

5

特定の人のことばかり考えているというのは、その人のことが好きだからだ。恋だからだ。漫画やアニメで知っているし、誰かに言うとき当たり前じゃないと鼻で笑われるような自然の摂理だが、僕にとっては初めてのことで。しかも、何度その人のことを思い返しても飽きると言うことがない。何度しても新鮮に感じる。恋というものは僕の想像した以上にすごいものだったらしい。

お客さんでいっぱいのカフェ。キッチンのドアごしにぼんやり聞こえる声。むせ返るほど鍋から漏れている蒸気。

目をつむついても平気なくらい、全て場所や間隔を把握しているキッチンの中、僕はオーダーの声に従うまま機械的に料理をしていく。

その合間合間に思い出すのももちろん千冬…さんのことだった。

大量に作った食べ物を二人でのんびり食べたあの日。帰りがけに軽くなっていたバスケット。あれは、僕の部屋の片隅に置いてある。あれから4日経ったが、まだ片づけていない。片づけないとな…

「オーダーです。レディースセット2つ」

織斑くんのはきはきした声がキッチンに響いて僕は思考を止めて顔を上げた。急ぎの喧騒が大きくなる。女性客の騒がしい笑い声に急かされるようにパスタを鍋に入れた。

それにしても、ここ一年で女性客増えたよね…。3 駅先にあるレゾナンスに続き、この町にも大型ショッピングセンターが完成したのもあるけど、

「英さん？」

オーダー後、そのままキッチンでドリンクを用意している織斑くんが不思議そうにこちらを向いた。

うん、織斑くんがバイトを始めたからっていうところが大きいと思う。織斑くん自身はいいんだけど女性が店に増えるのはちよつと、ね。鈴さんみたいに積極的に店まで押しかけてくる子もいるし、織斑くんがテスト期間で店に来なかつたりすると「今日はあの店員の男の子はいないんですか？」とか聞かれるって母さんが言ってた。でも、母さんからすると『計画通り』なのだろう。織斑くんをバイトに採用した時点で、『パスタ系は女性が好きだから』と主張して、メニューのリストにパスタの追加やレディースセットを提案したんだから。ちなみにレディースセットは一番人気のメニューだったりする。

今回もレディースセット…女性客2人、か。これが千冬さん、いや千冬だったら頑張ってるんだけど。

「英さーん？」

織斑くんが目の前で手をひらひら動かした。

こう見てみると、千冬、の弟だよ。顔立ちとかよく似ている。その顔がいよいよ心配になってくるのを見て僕はあわてて思考を打ち切った。

「あ、えと、ぼーつとしてた…」

お互いに苦笑しながら、作業に戻る。僕はパスタをゆでつつ、フライパンにオリーブオイルを入れ、織斑くんは氷をグラスに入れてオレングジジュースを注ぐ。厚切りしたブロックベーコンをカリカリになるまで炒めながら僕はちらりと時計を見た。僕がキッチンから出ず、日付感覚がないので時計の下には自動で日付表示されるように両親が設定している。そしてあの海の日からちょうど4日経ったことをデジタルの数字は表していた。

明後日、千冬、さんはドイツに行く。行ってしまおう。

「織斑くん、ち…お姉さんは…明後日ドイツに行くんだよね？」

カランと涼やかな音を立てて氷がグラスを叩く。織斑くんは驚いた顔をしながらも「あ、はい…」と言った。彼らしくもない歯切れの悪い口調に僕は触れてはいけな

に触れてしまったのではないかと手汗をかいた。

「英さんは何でそれを知ってるんですか？」

「あ、あの、このまえ、織斑くんの休みをつたえにきてくれたとき、いつてたから」

な、何か織斑くんの目がちよつと怖い。僕は年上のくせに情けないことだが視線に怯えながら答えた。僕の気持ちを汲んでくれたのか、彼は「そうなんですか……」と目をそらした。さつきの妙な気迫は嘘みたいに消えていて、代わりに14歳の年相応の少年の姿が現れる。

「……千冬姉は……しばらくドイツ行き準備で忙しくしてます。家に帰るのも遅いですし。俺にも何かでできればいいんですけど、……俺ふがないから。千冬姉に助けられてばかりで迷惑かけちゃって」

僕はぼかんと口を開けてしまった。初めてではないだろうか。織斑くんが弱音を吐くのは。いや、そりや、彼も鈴さんとか友だちに色々弱い姿を見せるんだろうけど、僕みたいな頼りないやつにまで弱音を吐くとなると……自分の為に働いてくれる姉と養われている自分の関係に相当罰の悪い思いを抱いているのかな。

そう思った途端、僕は必死で言葉を紡いでいた。

「織斑くんは、ち、おねえさん自慢の立派な、おとうとだよ。家事もしてるし、こうしてバイトもしてる……いま、おねえさんのためにできること、精一杯やってる」

いまだ僕なんかは親にお世話してもらっている立場なんだし、織斑くんはその年で自立しようと思っているなんて純粹にすごいと思う。

海でサンドイッチ食べながら「二夏の料理も美味いが英さんのはかなり……」などと言っていた千冬さ……千冬を思い出した。小さいつぶやきだったが、お客さんに料理を出す僕のご飯と思わず比較してしまうということは織斑くんの料理レベルはかなり高いとみていいだろう。彼がその年で料理が美味しい理由なんて姉の為に何度もご飯を作っていたからだとは思えないし、バイトをテスト期間以外毎日のようにこなすのも経済的に姉を支えようとしているからというのは想像に難くない。

……何より。

千冬が織斑くんを迷惑に思うなんて、絶対にないから。

織斑くんは珍しい僕の長いセリフに驚いたのか、一瞬押し黙ってから「ありがとうございませす」と微笑んだ。

自然と口元が緩む。

千冬が誤解されなくて良かった。それに、いつもお世話になってる織斑くんに初めて何か返せた気がする。最近いいことばっかだなあ。

浮かれている僕は織斑くんの次の言葉をろくに聞かずに頷いてしまった。

「明日の夜、…この店、貸切り出来ますか？」

この言葉のおかげで翌日天国と地獄を味わうことになるのだが、そのときはそんなこと知る由もない。

千冬はドイツに行く。

それは分かっているけど、僕には止められないことだ。だから、忘れられないように勇気を出してデートに誘った。そのおかげでまた会いに来るといふ言葉が聞けた。

そして、今日はその前日。僕と少し離れた席にはモスコミュールを飲んでいる千冬。きついが癖のないウオッカにジンジャーエールの琥珀色とライムの爽やかなグリーンが映えるこのお酒は千冬のお気に召したらしい。目を細めて喉を上下させている彼女は初対面のときのような凜とした空気が緩んで、気だるげで無防備だ。

そんな彼女を見ながら、僕もお酒を煽る。

(ドイツに行つちやう前にもう一度会えるとは思ってもみなかったなあ…)

ラツキー。

その一言に尽きる。

たまたま千冬の弟である織斑くんがこの店でバイトをしていたから。

たまたま織斑くんがここを貸切りして、千冬の送別会を開きたいと言ったから。

(本当にラツキーだなあ…)

だが、この会の為に磨き上げたグラスにはお世辞にも良いとは言えない顔色をしている男の顔が映っていた。

「あら、英くん。酔っちゃった?」

僕は、声の主を直接見ずに、コップの左端を見た。そこには僕の顔と同じくらい赤い髪をした女性が見える——五反田食堂の看板娘・五反田蓮さん。ああ、看板娘と言ったが、実際には僕の向かいに座っている赤毛兄妹の母だ。「28から歳をとっていいない」そうだが、中学生の子どもがいるということはそのこの

「ん?英くん?何考えているの?」

鋭い視線を感じて慌てて首を振り、コップのアルコールを煽った。背筋が冷える思いがしたよ。ええと、蓮さんは娘さんだ……彼女の左隣に鎮座している五反田蔵さんの実の娘さんだ。蔵さんは五反田食堂の大將にして一家の頂点。タンクトップで剥き出しになつている浅黒い腕は筋肉の形が皮膚の上からでも見える。僕にも少々分けていただきたい。彼は今無言でご飯を食べている。彼の孫の弾くんいわく、「じいちゃんは、食べながらしゃべるのはマナーが悪いって、いっつもなら中華鍋を……いってー!」。ちなみに最後に痛いと言っているが、それは蔵さんの重量感ある拳が振り下ろされたからだ。中華鍋をどうするのか、僕が知ることは今後ないだろう。

そして、その隣には緑の髪の女の子、山田真耶さん。千冬の友人のようだけど、年が

随分離れているようだ。一体どこで知り合ったのかな。あと、僕の向かいには五反田さんの息子さんの弾くんと娘さんの蘭さん、その隣に千冬、織斑くん、鈴さんの並びで5人が座っている。

こちら側に4人、あちらに5人。少々アンバランスな並びだ。

元々4人、4人座ってもらって僕は参加しないつもりだったのだから、仕方がないだろう。

そもそも僕がこの送迎会に同席しているのは。

「本当に大丈夫？英くん」

「だいじょうぶです……」

……なんでだっけ……えーと、たしか、いまが10時だからえーと2時間前だっけ？

午後19時。

「いらつしやいませ……」

入ってきた人たちを見て挨拶を出来た僕は相当強くなったのではないかと思った。千冬の前で逃げ出すわけにもいくまい。恋は人を強くする。

始めに入ってきたのは千冬、織斑くんだった。6日ぶりに会う彼女はやはり僕の目を

惹きつけてやまない。それにしてもこういうふうには姉弟で並ぶとやっぱり二人は似ているなあ。

しかし、そんなふうに悠長に考えられていたのは少しの間だった。

……だって、こんなにたくさんの人が。

まず、緑の髪の女の子。次に炎のように赤い髪の4人組。最後に入った女の子は普通の茶色い髪ではあるが、その髪についている黄色のリボンが無視できないほど大きい。

目の前がちかちか出したのは、色彩のせいだ……と思いたい。

僕は「こんにちは」と口々に発する面々を出来るだけ見ないように深くおじぎをし、きびすを返して「こちらの机になります」と案内した。各テーブルをつなげて8人座れるようにしておいたのだ。机の長い二辺に4人ずつ座れるようになっていた。さて、僕は飲み物を聞かないと。落ち着いて聞けば大丈夫。「お飲み物は、どうしますか？」という言葉が今日は練習してきたのだから。飲み物を聞いたら、料理をのんびり運んでいけばいい。あとは普段と一緒だ。キツチンにひきこもる。すると、普段と違い、今日はキツチンの中で千冬の声や普段の会話が聞けるといわけだ。ラッキーだ。

全員が座ったようなので、ドリンクメニューのリストを手を取った。

そのときだった。

「私たちが手伝うわよ」

振り返ると赤毛の女性がいた。赤毛の女性は二人いるが、年長の方だ。僕が予想外の切り返しに固まっていると、女性がさらに言い募った。

「私たち……ああ、私は五反田蓮。そしてこっちは私の息子と娘の五反田弾と蘭。このおじいちゃんはお父さんの五反田蔵。名前からしてわかるところと思うけど、隣町で五反田食堂を経営しているの。小さいころ、英くんに会ったこともあるのよ」

まあ、君は泣いてばかりだったけど、と苦笑しつつ、彼女はちらつと千冬の方を見た。「あなたも千冬ちゃんのお友達みたいだし、参加しなさいな。料理や飲み物を運ぶくらい手伝うわ。幸い今日のメンバーには食堂の店主と看板娘、その子ども、中華店の娘、この店のバイト君がいるんだし」

「そうよ、貸切なんだしそんなに気にしないでもいいわよ。私、鳳鈴音って言うの。中華店の娘は私のことね」

「もちろん私も手伝えます！あ、山田真耶と申します！」

会話の濁流に飲み込まれた僕は、言葉を発することもままならなかった。何この展開？

何とかこの奔流に抗おうとしている僕の進退を決めたのは、千冬だった。

「私も……英さんに参加してもらえればうれしい」

一声だけで。その一言で全員が動いた。

「そうと決まれば、一夏！行きましょ！」

「はいはい」

「飲み物何にしようかな」

彼女の声で僕の同席が決まった。ラッキーだ。だけど、何故か喜べない僕がいた。

だって彼女が堅い口調だったから。

僕を織斑くんの同僚として見ているから。

この人たちの前で以前二人で海に行ったときの呼び名で呼べなかつたから。

僕は千冬のことを好きなのは変わらない。けど、こんな僕から好かれてそれに少しでも応えるような行動をとった千冬のことを他の人に知られると、……彼らの千冬への対応が変わると思った。確実に悪い方に。

(僕が、千冬を貶める)

「一夏ー、早くー！」

「急がなくなつてもいいだろ」

「ちよ、何腕組んでるんですか！」

鈴さんが猫を彷彿とさせる動きで織斑くんの腕をつかんだ。胸が『当たってるんじゃない、当ててんのよ』というくらい引っ付いているのだが、それに反応したのは織斑く

んではなく、蘭さんだった。それをいかにも慣れた光景というようにそのままキッチンに行くメンバー。

あんなふうに『千冬が好きだ』って表現できたら。

それが出来るような人間だったら、立派な男なら良かったのに。

織斑くんを挟んで飛び交う火花と困ったような真耶さんの声、「そんなことはいいから、飲み物どうする？」と聞く能天気な蓮さん、さっさとキッチンに行く男性陣……

僕は近くにいた千冬を見た。

「お飲み物は、どうしますか？」

これが今の僕の精一杯だ。従業員として彼女と接触する。それが普通なんだ。

彼女は幾分戸惑ったように「私も行くが……」と言うが、「主役でしょう？」と押しとどめる。

「私は、…そうだな。任せる」

「はい」

少しの沈黙にキッチンにぎやかな声が混ざる。全員がキッチンに集まったようだ。狭いだろうによく入ったなんて感心しつつ、料理の盛り付けをしないといけないので数歩歩いたときだった。

「英」

「……なに？」

足が止まった。あの海の日と同じ呼び名。同じ、二人だけの空間。

僕は振り返った。そこにいたのは椅子に座って、立っている僕を見上げながら少し眉根を下げている千冬。

(なんで困っているの?)

千冬は僕を呼んだきり、彼女は迷っているように目を少し泳がせている。

「……急に押しかけてすまない」

「ぜ、ぜんぜん。いつでもみなさんには、きて、もらいたい……」

僕の反応をじっと見ている彼女を安心させてやりたかったが、返した僕の声には自分の正直な感情が明らかに出ていた。いわく、「みなさんには来てもらいたくないです」と。IS導入直後の僕と比べれば、この喫茶店で仕事をして織斑くんと話して幾分マシになったつもりなのだが、何人も人と、キツチンの扉を介さずに面と向かって話すのはまだ難しいのだ。

千冬を見れば肩を落とし、悲しそうにうつむいている。

……あ、しまった。僕には言葉が足りない。それは常日頃から感じていたけど、さっきの言い方だと千冬にも来てほしくないというようにも受け取れるよね。

「本当は千冬だけがいいけど」

誤解しないでほしい。僕はうつむく彼女の反応を見ようと首を傾けて覗き込もうとして、

「英さん！料理どこですかー？」

「あ、いま、行く」

織斑くんの大きい声がキッチンから聞こえた。キッチンは僕の活動できる範囲。生きた場所。聖地。そこを勝手にいじられたらたまったものではない。

急いでキッチンに向かった僕が見たのは、何かを待ちわびているような、妙に輝いている表情の面々だった。そんなにお腹がすいているのかな。悪いことをした。

「えっと、いまから、出します……」

菜の花とささみの辛し和え、春菊とホタテのスープ、炊き込みご飯、竜田揚げをよそって持って行ってもらう間、僕は蒸し器のふたを上げた。これが、本日のメインだ。蒸気がふわっと立ち上ると同時にかぼちやの甘い匂いが狭いキッチンいっぱい広がる。

「わー、おいしそうー！これ、何ですか？」

女性の声だ。僕の頭2つ分ほど下から聞こえる。

恐る恐るそちらを見ると、緑色の頭がぱつと上を向き、きらきらとした目がこちらを……しっかりとしろ、僕。これは喋るかぼちやだ。このキレイな緑は、熱が通り過ぎず、通らな過ぎず、ちょうど良いタイミングで蒸せたということ。野菜が自分の手で鮮やかに

発色するのを見る瞬間が僕はとても好きなんだ。本当ウマクデキタナー。

蒸し器から出したかぼちやに僕は説明をした。

「かぼちやの宝蒸しです……わたをくりぬいて、代わりにきくらげ、鳥肉と白身魚、ねぎ、にんじん、グリーンピースなどを今回はいれました……」

この料理なんだけど、縁起が良く、祝いの席に出されるとされる（無論ソースはインターネット）。千冬がドイツで教師をわざわざしに行くことは多分昇進？とかだよな？行った先に、幸があるようにという意味でも今日はめでたい料理を作りたかったんだ。

「へえ、私初めて食べます！」

「私もよ。おいしそうねー」

「英さん、日本料理もおいしいんだよな」

何故かかぼちやではなく、離れたところから複数の声が聞こえたが、全力で気にしない。皿にうつすとかぼちや丸々一個と中身の重さでなかなかの迫力だ。鍋にだしや薄口しようゆを入れて煮立ったところに片栗粉を入れてあんを作った。黄金色のそれをケーキのように切れ目を入れた宝蒸しにかけると、電気に反射してきらきら光る。

「運はら」

横から筋骨隆々の腕が伸びた。本当にその筋肉うらやましいです、厳さん。

しかし、幼いころ僕が会うと泣いてばかりだったというのも分かる。小さい僕がこの人の圧迫感に耐えられたわけがない。今でも正直この圧力に負けそうなのだ。それに。千冬用のモスコミュールと熱いお茶、自分用のお酒を運びながら、ちらりと厳さんを窺う。その目は僕の料理にじつとそそがれていて、その場を逃げ出したい気分になった。

彼は、五反田食堂の店主なのだ。ただでさえキッチンと部屋にひきこもっていた僕は、自分の目の前で自作のご飯を食べてもらおう経験なんてない。千冬は優しいからどんな料理だろうとおいしいと言ってくれたけど、このいかにも厳しそうでしかも自らも料理で生計を立てている人にご飯を食べてもらうなんて。

逃げ出そうとしたが蓮さんの隣に強制的に座らされた。「乾杯」の声を聞きながら、僕は腹をくくる。撤退不能なら、いつそすぐ寝てしまおう。ぐつと一気にお酒を飲みこんだ。冷たい喉ごしに反して、少し遅れてお酒が通った部分が熱くなる。冷たいのに熱いって変なの。というか、僕ってお酒強いのか弱いのか分からないだよね。一緒に飲む人もいなかったし……とりあえず厳さんの持ってきた日本酒にした(きつと料理と合うだろうから)けど、僕っていつ寝れるんだろ。とりあえずもう一口

「うま」

声が聞こえた。

「じいちゃん、料理に手つけるのはやつ！」

蔵さんがこちらを見ていた。

それに続いて、「おいしい！」という声が続く。

「英くん」

隣を見ると蓮さんが笑っていた。その目は一人立ちをしようとしている子どもを見るような母親の目で……やつぱり娘さんじゃないよ。お母さんっていうのがしつくりくる。

「あら、英くん。酔っちゃった？」

意地悪そうに聞かれて僕は照れで赤くなった顔を隠すように首をふった。それはそれで子どもみたいだから素直に「滅多に人の反応見ることないんで……嬉しかっただけです」と答えたけど。

「ああ、ここってキッチンと食べる席が完全に隔てられているから見えませんよ」と蘭さんが勘違いをし、みんなが「ああ、そっか」と頷く。そう思っていてくれると助かる。

だって、馬鹿みたいだろ。

キッチンにひきこもっているから反応を見られなかったただとか。

自分の料理を食べる人の反応を見るのに5年かかったとか。

「おいしい」って言う他人の顔を見るのが嬉しいとか。

そんな簡単なことに今気づくなんて。

千冬においしいって言ってもらえれば良かった。けど、たくさんの人に言ってもらいたかったんだな、食べてもらいたかったんだなって初めて知ったんだ。

「さすが喫茶『はなぶさ』の大将ね」

「……大将というか、料理人、です」

からかう蓮さんに言葉を返しながら、何かがすんと胸の中に収まるのを感じた。僕は、自分をひきこもりだし、人前に出るのが苦手で、どうしようもなくて人に言えないことばかりだった。唯一僕の中で確かなことといえば、千冬が好きなことだけだった。それだって、他の人の前ではまだ言えないけど。

だけ。

……僕は『料理人』なんだな。

そう、言ってもいいんだな。

日本酒をもう一口飲むと、ぽかぽかした。目元も何だか温かくなってきた気がするけど、きつとお酒のせいだと思ってもう一口飲みこんだ。

人がお酒を飲む場は少し特殊だ。昼から夜までお店を開けている店の雰囲気は、キッチンノドア越しでも分かるくらい変化する。昼のお客さんは元々知り合い同士で来ていて、その輪の中で楽しんでる。会話は楽しそうにはしゃいでいるものだったり真面目なものだったり色々だけど、まるでそれぞれのお客さんが個室にいるがごとく他の人をシャットアウトする壁を持ってているんだ。だけど、日が傾き、夜も深くなってくると、その壁は徐々に薄くなる。お酒を飲むと、人間が無意識のうちに張っているバリアがなくなり、店全体が一つの部屋であるかのような空気が出る。自室にいるようにくつろいで、話の輪に急に入ったかと思うと、ふいつと違うところに行ったり。お酒を飲むと、人間というよりも猫に精神が近くなるんじゃないだろうか。傍若無人。気ままで、我儘。人間世界にある『目の前の人と話す』『好き勝手にしてはいけない』などといった暗黙のルールなんて総スルー。

酒は百薬の長とも悪魔の水とも言うが、明らかに後者が正しいよ。あっさり人間辞めさせられてる。

僕はいつもなら夜は特にキッチンに閉じこもっているのだ。

次の行動が予測できない本能丸出しの人たちがいる場なんて恐怖の対象でしかない。そう、いつもなら。

だが、今。

僕は理解していた。これは悪魔に屈して人間の自分を売り渡してもいい気分になると。

体が温かくなって、周りに壁がないどころか、自分と空気の間境界線がなくなっている感覚。長風呂に入ったみたいに皮膚がふやけてお湯みたいにぬるい大気に溶けてしまいそうな感覚。それが途方もなく気持ちいい。かろうじて、僕は酔ってはいないけれど。いわゆるほろ酔いつてやつ？あ、そんな名前のチューハイのCM見たことあるな。あれってどんな味がするのかな。のんでみたい。

「それにしても……カフェにこんなメニューあるんだな」

もぐもぐと咀嚼しながら弾くんが不思議そうに言った。早速飛ぶ巖さんの拳。速すぎて「痛え!」「行儀が悪い」という二人の言葉がなければ、状況なんてさっぱり分からなかったよ。しかし、確かに。パスタやサラダが似合いそうなシックな店内に、家庭的な日本の料理があるのはおかしいと思うよね。

「あー、……めにゆーにはないんだよ……だって、明日から、ドイツでしょう……すしと

か、カリフォルニアロールみたいな、有名な日本食ならたべられる、だろうけど……なかなか、他のものは難しいだろうし……今日はとくべつ。

だから、他の人に、……喫茶『はなぶさ』の日本食がおいしいよー、って、せんでんしないでね」

無茶苦茶長い言葉を僕は話した。話しすぎて喉がかわいたなあ。それに動かない頭を乱暴に動かして話したからつかれたよ。のみもののみもの。

マティーニを飲んで「ふう」と息を吐いた。レモンの果皮を加えたのは正解みたいで、ドライ・ジンやベルモットの辛みに対して、良いアクセントになっている。不思議なことにアルコールはいくら摂取しても喉が渴くんだ。飲み物なのにね。どの国家もIS開発に莫大な予算を費やしているみたいだけど、喉がかわかないお酒を開発する方が余程良いと思うな。で、もう一口。

ことんとマティーニグラスを置くと、前から手が伸びた。あ、まだマティーニにつけたオリーブを食べてなかったのに。

恨みがましい目で見ると、犯人は織斑くんだった。ごく自然な動作で僕のグラスの他にも空になった皿を重ねながら、「もつたいないよな」と笑っている。うん、何のはなしだっけ。喉の渴かないお酒を造らないでIS開発に力を注ぐ日本人の技術がもつたいないってのはなしだっけ。

僕が一人で首をひねっている最中にも、織斑くんと弾くんは仲良く話し込んでいる。

「一夏は、まかないこの賄いも食べてるんだろ？いいなあ。うらやましいぜ」

「だろ？英さんは、中華も作れるんだぜ。酢豚もうまかつたし。この賄がおいしいから、いつも遅くまでバイト頑張ろうと思うんだよな。昼にも食べられればいいんだけど学校あるし、夜だけの楽しみだな」

そんなこと思ってたのか……今度の賄にはデザートもつけよう。

一人で領いている僕はお酒で大分危機管理能力が低下していたのだと思う。彼の横にいる女性の目が獲物を見つけた肉食獣のごとく光つたのに気付かなかつたのだ。

「英さん!!料理教えてください!!」

急な声に僕はびくつとした。鈴さんと蘭さんが熱い視線で僕を見ている。もちろんこれは恋する視線など甘いものではなく、諾と言わなければどうなるか分からないという脅しの視線だ。息苦しくなり、手を伸ばすとグラスが消えている。あれ？

「おー、二人とも料理習うのか、うまく出来たら食べさせてくれよ」

「最初からそのつもりよ/です!!」

そうそう、織斑くんに向ける熱い視線が恋の視線というものだよ。……あれ？

「大変ですね」

と、真耶さんが大人びた笑いを浮かべた。もしかして僕がこの二人に料理を教えるこ

とが決定している、だなんてこと……

「ねえ、ふたりとも……」

「何？／＼何ですか？」

温かったはずなのに、背筋に冷たい汗が伝い落ちた。僕は必死でもつれそうになる口と頭を動かして訴える。

「あ……その、僕、店で、ていっばいで、あの、……レシピわたすから、……それみて練習、でいいかな……」

すると、二人とも悩んだ顔をしている。何か言いたげに口を開けた二人を遮ってくれたのは千冬だった。

「二人とも。レシピを見て作った試作品を食べてもらえばいいだろう、たとえば、ここにいる一夏に」

彼女の一言に急に二人の目が輝いた。

「食べてくれるわよね?!／＼食べてくれますか?!」

「あ、ああ」

千冬ありがとう！ほつとしたのと、また女性と関わって面倒ごとに巻き込まれそうになったことで、安堵と疲れから深い息がもれた。

「どうしたの、英くん。ため息？」

「蓮さん、…べつに…」

「千冬ちゃんがいなくなるのが、寂しいんでしょ？」

「あたりまえです」

僕は人前で話すのが苦手だから蓮さんはたびたび話しかけてくれる。こういう面倒見がいいところや気が遣えるところは、看板娘だよな。

僕は千冬の方を見た。明日千冬はドイツに行くんだと思うと、例えようもない焦燥感だけが募った。彼女は相変わらず凜としているが、少々顔を赤くしている。ちよつと酔ったのかな。とは言っても、この面子の中、離れている彼女の元に届くくらいの大きな声で聞くのには勇気がないから、自分の飲み物取りに行くついでということにしてお冷を取りに行くことにする。

まるで最高級の絨毯の上のように、ふわふわした床を足で踏みしめながらキッチンのグラスを取り、製氷機を開けた。

(……のど、かわいた)

僕は彼女の分の他に自分の水も汲んでゆっくり飲み込んだ。

近くのシンクに行儀悪くもたれかかれれば、ひんやりした感覚と同時に、心地よい気だるさに襲われる。一度もたれかかって初めて足が変だと気付いた。なんだか膝がぐにやぐにやで、骨がなくなつたようにうまく立てない。うーん、困つたなと考えている

とドアが軽い音を立てて開いた。

千冬。

「英さ……はなぶさ」

「千冬さ……ちふゆ」

あははと笑いあつた。

千冬。やはりこれが自然だ。ベストだ。

気付けば彼女もシンクにもたれかかっていた。二人でグラスの水を飲む。二つ用意していたはずだが、二人の間に置いていたせいかどちらの飲んでいたものか分からなかった。でも、それでもかまわない。喉の渇きが癒されればどちらでも良かったし、千冬なら良い。

「これ、ありがとう」

差し出されたのはジャケットだった。見覚えがほとんどないからぼけつと見てしまったが、「海の日は、助かった」と言われて気付く。僕が千冬に会う直前に脱いだ丈の短い、えーと、ジャケットだ。名前は忘れたが。

ただ、お礼を言われたものの、寂しかった。

これで僕と千冬の会う理由がなくなつた気がしたんだ。僕らの関係は本当にもろいと思う。織斑くんのように血のつながりもなく、五反田一家のように長く一緒にいて家

族同然に思われているわけでもない。真耶さんみたいにかくさんの思い出を共有する友人でもない。ましてや、恋人でもない。胸がムカムカする。

酔ったのかな。

シンクに腰を預けた格好すら保てなくなってきた。床が絨毯どころか学生の頃乗っていた電車が急停車するときみたいにフラフラ揺れて、思わず千冬の方にも倒れ掛かった。

「は、はなぶさ?!英!」

彼女が名前を何度も呼ぶ。

焦っているようだけど、多分ちよつと酔いが回っただけ。

「ごめ……もうちよつと、このまま、で……」

だが、女の腕では支えきれなかったのだろう、ずるずると僕は彼女を巻き込んで床に座り込んでしまった。

僕の右腕から彼女の体温が伝わる。どれくらい時間が経ったのか。ほんの一分だったのかもしれないし、十分くらいだったのかもしれない。胸のムカムカはいつしか止んで、代わりにドキドキと鼓動がうるさいくらいに鳴り響いている。

振り返ってみると、この状況とか自然ときつき間接キスしてただとか情けないやらで体育座りをしている膝に顔をうずめてしまった。恥ずかしい。酔いが醒めたんだ。

お酒はやつぱり悪魔だったようだ。

こんなときに、僕を人間に戻すなんて！

「英？大丈夫か？吐きそうなのか？」

「だいじよぶ……も、ちよつと、まって」

優しい彼女には申し訳ないが、とてもじゃないが顔を上げられる状態ではなかった。きつと真つ赤で、恥ずかしくて死にたいって書いてあつて、それでも妙に幸せそうな顔をしているんだろう。

「今日参加してくれて、嬉しかった。相変わらず料理もおいしかったしな……また食べたい」

千冬がぼつりと言った。ドイツに行くんだから、なかなか来れないよな。日本食は海外に行くくと恋しくなると聞いたことがある。僕は向かいの棚を指さした。

「ちふゆ、あの……棚のなかのノート、出して」

彼女が不思議そうに取り出したものは一冊の何の変哲もないノートだ。1000円で売つていそうな安っぽいデザイン。ところどころ古ぼけているものだが、僕の何よりも大切なもの。

「これ……中、見て……」

「……」

彼女のページをめくる音が聞こえる。

ばら、ばらり。

めくる音を聴きながら僕は後悔していた。

嬉しくないよね。ノートなら軽いし、ドイツに持って行くのにもかさばらないと思っただけど、作り方なんか自分でネットで調べればいいし……それでも、何か僕のものをもらってほしかった。

「……高校卒業のじきまで、じぶんで、料理作ったこと、なくて、……料理食べてもおいしくないって思ってたんだ……でも、料理してるとおなかが減って、自分で作れば、その料理ってほんと出てくるものじゃないってわかって、……料理たのしくなってるけど、ずつとかきたためたレシピなんだ……ここの、その、料理人するまえのも入ってるけど……もらって？」

脈絡のない話だが、とにかくもらってほしかった。僕は顔をうずめたまま、彼女の反応を待つ。

「……いいの？」

「え……」

「ここまで書くのは大変だったろう？……鳳や蘭のように欲しがるやつもいるぐらいなのに、それを……」

安心するあまり膝から顔をあげて千冬を見た。ずっと眼窩のあたりを押し当てていたから電灯がまぶしい。でも、そんなことより嬉しかった。僕の送ったものが迷惑にならないって分かったから。

「千冬なら、いいんだよ」

「……………ありがとう」

そう言っただけで彼女は小型の通信機を出した。……………なに？

「料理は不得意でな……………良ければ、その、通信しながら、料理を、作りたい……………だめか？」

「あ、あ？ああ！もちろん教える！あああの、……………携帯なくなっ……………パソコンなんて……………え、と、」

言われていることに数瞬遅れて気付いた。ゲームやテレビ電話など出来ることは知っていたけど今までやったこともなかったから。

ちなみに一応パソコンくらい持っている。さすがに前世紀の固定型じゃなくてポータブルのパソコンだけだね。僕のパソコンは写真立てみたいに置いておける小型端末を付けて……………って、そんなのはどうでもいいんだよ！あ、アドレス交換ってどうするんだっけ?!

「……、英のアドレスを打ち込んでくれ」

慌てふためく僕に千冬が笑いかける。急いで打ち込むと（何回か打ち間違えたけど）、

電話帳には僕のアドレスがぼつんと

「……携帯を昨日新しいものにしたばかりでな。登録するのは、初めて、なんだ

……英」

ちよつと早口で言う彼女をどうして可愛いと思わないでいられようか。

愛しくて、胸が苦しくて、桃色の頬をしながら目をそらす彼女をしつかり見たくて、座り込んだ姿勢のまま彼女の方を向く。向いた途端に床に上にあつた彼女の手は僕の手が重なつた。お酒を飲んだ二人の体は熱くて、同じ体温で、さもすれば一つになつてしまふような程だつたけど、千冬は雷に打たれたように身を震わせてこちらを見た。

女性だ。でも、千冬は他の女性とは違う。もつと、もつと、近くにいたいし、特別になりたいし、もつと、…………——感じたいんだ。

欲望につられてまつ毛の生え際が見えるくらい近づくと、ぼつちり見開かれた黒曜の瞳にとらわれた。顔に当たる息がくすぐつたくて、交互に吸つたり吐いたりするリズムを合わせる。同じ空気を吸っている。

甘くて、熱くて、苦しい。

そんな感覚が幸せだった。

白い肌と紅に染まつた目元、軽く閉じられた目と、清楚に嚙まれた唇。それが、僕が目を開ける直前に映つた視界のすべてだった。

もっと、と少し顔を傾けて彼女の放つ息を飲みこむように、近づいて、それでも止まらなくて、息の源に触れようと

「千冬姉！」

どん、という衝撃と冷たく堅い背中感触。

「英さん？どうかしたんですか？」

次に目を開けたとき、見えたのはキッチンの少し汚れた天井と、織斑くんの顔だった。
「……………あ……………ねむくて」

僕はぎくしゃくと身を起こした。

「酔っちゃったんですよ。かなりペース早かったですから」と言う彼の顔が見れなかった。僕は、一体何をしようとしてたんだ……………？

「千冬姉……」

「……」

「明日早いそうなので、今から撤収しますね」

「あ、ああ、うん。見送る……」

彼に助け起こしてもらいながら、キッチンから出る。机の上はきれいに整頓されていたけど、蓮さんや真耶さんは「片づけ手伝えなくてごめんなさい」と口々に言っていた。僕は首を振りながら、出来るだけ彼女の方を見ないようにしていた。

「……それじゃあ、おやすみなさい」

「ご来店いただき、ありがとうございます」

深々とお辞儀をした。

外の空気は肌寒いくらいだ。ちらりと見ると彼女の後ろ姿が見えた。先ほどまであんなに近くにいたことを考えれば、この距離はかなり遠かったがそれで良かった。

僕と彼女は恋人じゃない。

なのに、あんな……もう一度地面を睨むようにして深々とお辞儀をする。謝罪の意味を込めて。アドレスは彼女の方にしか教えていない。ということは、千冬が僕にかけてくれないと、連絡がとれないということ……

もう、二度と会えないかもしれない。

時間が経って姿勢を直す。もうそこには誰もいなかった。最悪の気分のまま、振り返ると、……—いた。

「ねえ」

うさぎだ。完全に思考が停止した。

うさぎに不思議の国のアリス？ここ、現代日本だよ。異世界トリップとか、は。

見慣れたカフェが完全にうさぎの背景となっているのを確認してない、と否定し、うさぎを観察する。というか、うさぎの耳をつけたアリスのコスプレをした女性だった。

……久しぶりに外に出たら、こんなのに引つかかるなんて。

先ほどまで『最悪』だと言ったことを撤回したい。今が最悪だ。

「ちーちゃんに付きまとうのやめてくれない。どうせ何か思惑があるんだろうけど、どこの組織？それにしては私の通信網に引つかからないし……個人で？ちーちゃん、ブリュンヒルデだから何か甘い汁でも吸おうとか？」

早口だった。僕の方を見ているようで目に入っていないという印象を受ける。思わず、後ろを振り向いても誰もいないから多分僕に向かって話しかけて

「ちよつと聞いてるのかな、君だよ、君。イトウハナブサ」

不思議な発音だった。まるで人間の名前じゃなくて、機械か無機物の名前みたいだ。僕の中で一つの言葉が思い浮かび、腑に落ちた。

僕と同じ、コミュ障。

「何でこの天才束さんがこんな凡人の名前なんか呼ばなくちやいけないんだよ、時間が全くもつたないよ。どういう了見で君は私の時間をつぶしてるんだよ。ちーちゃんに寄ってくる虫はいくらでも湧いてくるなあ。いつそ——」

いや、絶対、僕以上だ。

時間の無駄だと思ってるなら速やかにお帰り願いたい。胸がムカムカする。酔いは醒めたはず……本当に気持ち悪いかも。

とりあえず、この女を突破しないとカフェに戻れやしない。僕はたびたび話に出てくる人の名前を口にした。

「ちーちゃんて？」

「ちーちゃんは、ちーちゃん。織斑千冬。ブリュンヒルデだよ。しらばつくれるの止めてくれるかな？ 時間の無駄」

（ああ、千冬の愛称。で、ブリュンヒルデって戦乙女のことだっけ？ 何でこの場面で？）
アニメや漫画の中でしか聞いたことがないワードに再び黙り込みながらも、僕は答え

を導き出していた。それは重大な病。僕はひきこもりだけど、中学校のときは学校に行っていたから分かる。あの年頃の男子が特にかかりやすい、そして大人になっても心に傷跡を残すだろう病。

中二病。

(この女、多分千冬のファンなんだろうな……中二の入った)

それでどこからどう調べたのか分からないが、僕の存在を知り、千冬に近づくなと言いに来た。

ますます胸のむかつきがひどくなった。

「ブリュンヒルデなんかどうでもいいよ。千冬はただの千冬だ」

千冬はただの女性だ。達筆で、絵が絶望的なまでに下手で、子どもっぽいところもあって、可愛くて、すごく優しい。

どうしようもない僕でも、それくらい分かる。目の前にいる女性が千冬をどう思おうと勝手だ。そりゃ、千冬は神格化するまでに魅力的だからブリュンヒルデと言っても差し支えないかもしれない。でも、彼女は人間だ。神様なら一人ぼっちで孤高でいいのかもしれないが、人間なら一人じゃ生きていけない。部屋とキッチンくらいしか行き来しない僕です

ら母さんと父さん、織斑くんがいなきやいけないんだから。

なのに、何の特権があつて、彼女を孤独にしようとしているのか。今までもこいつがこうやって彼女に近づくと人間を追い払おうとしてきたのか、と思うと苛立ちしか募らなかった。それこそお前は神様のつもりか、と。

「僕が近くにいていいかなんて、お前が決めることじゃない。千冬が、決めること」
最高にキツイ声が出た。

生まれてこのかたこんな声を出したことなんてなかった。

今日のことを思い出すと、千冬は二度と僕に近づきたくないと思つたらうけど。

でも、僕の後に彼女を幸せに出来る男が現れて、この女に何か言われないうちに……
そう思うと哀しいやらむなしいやら腹が立つやらで、胃の奥から何かがせりあがつてくるのを感じた。

(ヤバイ)

肩をぶつける勢いでうさぎの脇を通り過ぎ、ドアを手探りで閉め、トイレで思いつきり吐いた。

「う、うえ……」

相変わらず最悪の気分で、口をゆすいだ後、僕はベッドに横になった。

体も心も疲れていた。

底なし沼のように体がベッドに沈み、意識はさらに暗いところに落ちていく。

(せめて、千冬は、幸せに眠れるように)

そう考えたのを最後に僕は完全に眠りに落ちたのだった。

ドイツと日本【The distance is...】

4 (千冬視点)

こんな夢を見た。

長年一緒にいる、多分…友人の顔。

「ちーちゅわあんっ久しぶりだね東さんはちーちゃん成分が足りないんだ今すぐハグしようしようしよう」

こんな変なことを言う奴を私は一人しか知らない。

満面の笑みを浮かべている目の前の顔に私は手を伸ばした。句読点や文脈の大切さ、コミュニケーションの何たるやを論ずる必要性を感じる程だったのにも関わらず、急に彼女は口を閉ざす。

赤みを帯びた目を潤ませ、熱い吐息を漏らしている。彼女の桃色の頬に触れるか触れないかの位置で私は思わず手を止めた。

「ちー、ちやあん……」

弱々しい声。いつそ苦しげにさえ思える息遣いをしている我が幼馴染・篠ノ之東は、傍から見ると――

こんな夢を見た。

お節介焼きの、気恥ずかしいが…母の顔。

「千冬ちゃん、その服は？……へえ、英くんに。どうしてそういうことになったのかしら？」

こういうふうには私を茶化しても何ともないと思っているのは一人くらいだ。

私は紙袋の中身が見えないように腕の中に収めた。紙袋がぐしゃ、と抗議するように音をたてた。

「服にしわが寄っちゃうわよ？」

くすくすと笑っている。赤毛の髪が揺れて、いつも水仕事をしているせいで荒れ気味の手で耳元にかけられる。私はあきらめて袋を手を持ち替えた。今更隠しだとしてもすでに中身については知られているのだ。

「海に一緒に行きまして。そこで」

その答えは蓮さんをまたひどく楽しませたようだ。くすくす笑って半歩近寄られた。しまった、紙袋を蓮さん側の手に持っておけばよかった。

「その答え方、英くんにそっくり」

彼、口下手なものね。

そう言つて愉快そうに笑うと頬に年相応のほうれい線が見えて、彼女はますます慈愛に満ちた母のように

「ん？千冬ちゃん？何考えているの？」

鋭い視線に思わず背筋が伸びる。

「それじゃ英くんと初めて会つた時のことから詳しく話してもらいましょうか」

蓮さんの延々続くと思われた質問攻めが真耶との合流によつて一旦途切れるのは数十分後。だが、それにほつとしていた私は、英の店に着いた後も蓮さんの会話に赤くなつたり青くなつたりさせられることになるのは、そのときは知らなかつたのだつた。

「千冬ちゃんがいなくなるのが、寂しいんですよ？」

(何を聞いてるんですか?!……英は、やっぱりそう答えるんだな)

こんな夢を見た。

私が……どうしたらいいか分からない、彼の顔。

「……高校卒業のじきまで、じぶんで、料理作つたこと、なくて、……料理食べてもおい

しくないって思ってたんだ……でも、料理してるとおなかが減って、自分で作れば、その料理ってほんと出てくるものじゃないってわかって、……料理たのしくなって。これ、ずつとかきためてたレシピなんだ……ここの、その、料理人するまえのも入っているけど……もらって？」

厨房の床に体操座りをしている上に、自分の膝に顔をうずめるようにしている。表情まではうかがうことは出来ない。だが、カンパリ色に染まった頬はなにもお酒のせいだけじゃないんだろう。

「……いいの？」

「え？」と聞き返す声を聞きながら一緒に何となく体操座りをしてみる。

私に何故か好意を持ってくれている彼が口下手だというのは分かっているし、束ほどではないが人付き合いが苦手なタイプじゃないかというのも気づいている。けど、こういうふうに関き返されて自分の感じたことを全部言わされると気恥ずかしい。

(絶対英にはそういう意図はないんだろうが)

「ここまで書くのは大変だったろう？……鳳や蘭のように欲しがるともいるぐらいなのに、それを……」

いいの？

私にそれをもたらうだけの価値はある？

わざわざ聞くことじゃない。もらってと頼まれているのだから、素直にもらえばいいのに。

自分が女々しくなった気がして、英の反応が気になり隣を見ると目が合った。

「千冬なら、いいんだよ」

今度は私が顔をうずめたいくらいだった。

（どうして！私に質問したり何かしようとする時は照れるのに、さらっと……）

「……………ありがとう」

いたたまれない気持ちのまま、彼からもらったノートを開く。ノートにはあの日海辺で見たのと同じくらいお世辞にも綺麗とはいえない文字が並んでいる。踊っているように見えるそれらを捕まえようとたどってみると、少し黒くこすれてしまい慌てて指を離した。

……………この字を理解しながら、全く普段しない料理をするのは無理だろう。ポケットの中で硬い感触がして私は提案した。

「料理は不得意でな……………良ければ、その、通信しながら、料理を、作りたい……………だめか？」

「あ、あ？ああ！もちろん教える！あああの、……………携帯なくって……………パソコンなんだけど……………え、と、」

「……、英のアドレスを打ち込んでくれ」

確かに何かしようと誘うのは案外恥ずかしいかもしれない。

嬉しそうに顔を輝かせながらたどたどしくアドレスを打った彼から携帯を返されながら、はたと気づいた。

一件目。

「……携帯を昨日新しいものにしたばかりでな。登録するのは、初めて、なんだ……英」だから、何なんだろうな。と少し顔に熱が集まる。

喉も渴いたし、水でも飲もうと目をそらしたときだった。

英の手と、私の手が重なった。

ぱつと振り返ると、視線も重なった。

それだけだ。なのに、全身がしびれた。英は花の蜜を吸いに来た蝶みたいに私にすり寄った。まるで私がおびき出したみたいで全然いやらしいと思わなかった。私の頭はアルコールを摂取しているとは思えないくらい驚くほどクリアで、英がしたいことが、もしかしたら彼以上によく分かっていた。

(ああ、キスされるな)

恐らく私の年代であるまじきことだが、私は一度もそういうことをしたことがない。14歳からI Sと関わって戦ってそんな日々。だが、経験を積んだ熟年の女のように私はこれから起こることを確信した。

同時に形容し難い衝動が湧く。それは外に出そうなもので、内に抑えつけると甘くはじけるのがすごく心地よかった。

吸う息が顔にかかって、少しくすぐったいような気がして思わず身をよじったのが数秒後。一夏が厨房に入ってきたのがその直後。私が彼を突き飛ばして「そろそろお暇するか」と言ったのがほぼ同じくらい。

そして、それから、ドイツに着いて一週間後。

(どうしたら……)

私はまだ英に連絡を取れずにいた。

5 (千冬視点)

『少しの手間』で出来る。『いくつかの操作』をするだけ。

人によっては、それが難しいこともある。

頭の中では分かっていたつもりだったが、それを今思い起こしてしまうのはきつと私
が本当の意味で理解していなかったからだろう。常識を辿るだけで実感してこなかっ
たなんて、何て視野が狭かったんだろう。

たとえば、イグニッションブースト。

ISの後部スラスター翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して
放出する際に得られる慣性エネルギーをして爆発的に加速するのがこの技術。するこ
とはわずかで、瞬時加速したい速度の分エネルギーを出し、吸収、再度出すのみ。気を
つけないといけないのはエネルギーを出す量と吸う量が同じになるかどうかという
ことだ。これが呼吸のように出来る人間もいれば、吐き出す量が多すぎて機体がガタつ
いてしまう場合や逆に過呼吸のように吸いすぎて止まってしまう場合、タイミングが悪
くて敵ISの攻撃に自ら飛び込んでしまう場合もある。

「C0037、タイミングが遅い」

土埃をものともせず、戦う少女たちをコックピットから見ると、汗のせいで土が顔にまで貼り付いてもそれを払うこともせず、視線は相手に固定されている。ここではISをスポーツやファクションと思う者は一人もいない。そこにいるのは力を求めるものだけだ。さすがドイツ軍といったところか。

特にその中でも異彩を放っている銀の娘に私は指示した。すぐさま、

「はっ、教官」

という返答がくる。機体にはかなりの反動がきているはずなのに少し眉根を寄せただけで動揺せず再度攻め込む。

『教官、強くして下さい』

赴任した当初私に言ってきたときと同じ目をしている。左目には眼帯をつけているため、隻眼ではあるが、その一つの目が弾丸のように真っ直ぐその意志を伝えていた。右目は真っ赤に燃えている。

私は知っている。その眼帯の下の目は、ナノマシンの手術が施されたのだと。適合に失敗したため、彼女のみ眼帯をつけているのだと。彼女は遺伝子識別強化体C0037であるということ。これも赴任した当初渡された資料にあったからだ。

「クラリッサ、瞬時加速は速いが、所詮直線だ。軌道を予測しろ」

「はっー」

部隊員には名前がある。ある者は軍から、ある者は自ら名前をつけたらしい。「自我に無駄に目覚めている」と苦々しく言う軍人はいるが、むしろ私はほっとしていた。親がいなくても、ナノマシンの手術を受けても、彼女たちには個人としての思いがあることが、同様に親がない私には嬉しかったのだ。

「では、休憩」

名残惜しいように唯一名無しの少女はISを解除した。自分で付けなくてもいいが、せめて名前を必要と感じて欲しいと願う。彼女のなりふり構わず訓練に励む姿は人間というよりロボットを見ている気分させられた。

(お前も、一人なんだ)

彼女は黒い機体にもたれて指で機材をなぞっている。小柄な体軀は影に見えなくなり、それが彼女の存在を呑み込んでいっているようで私はぞっとした。

たとえば、食事。

休憩の時間に食堂に行く者もいれば、パンに素材を入れてサンドイッチを作ってくる者もいる。ちよつと足を運ぶだけ、手間をかけるだけで済むのだ。だが、眼帯の少女は食事の時間にも黙々と射撃訓練をしているようだった。そもそも栄養バーや水分以外

を採っている姿を見たことがない。

本来ならば白磁の瑞々しい肌をしているはずの十代が、げっそりとこけ、乾燥した和紙の肌を晒しているのは悲しく辛いことだ。食事時間が終わると再びその体を日の下に投げ出す。

不思議なことに食べないという行為は、本来隠しておくべき動物的な部分がむき出しになって印象を与えた。彼女は相手に今日も躍りかかる。

敵意。

殺意。

憎悪。

同じ部隊の者という意識が微塵も感じられず、むしろ負の感情が感じられるのは彼女だけがナノマシン適合を失敗した劣等感があるからだろうか。私が赴任してから部長の噂も囁かれるほど上達したが、それまでは出来損ないと言われていたそうだから。いつ追い落とされるかという恐れが彼女を生き急がせているようで、隊の中でぽつんと浮いた存在だった。手負いの獣のように他の者と馴れ合わず威嚇するのだ。

「C0037、ISを解除。トレーニングに参加しろ」

「はっー」

(また)

背筋が騒ぐ。

声掛けで振り返った彼女の表情は見たことのある色をしていた。『出来損ない』の自分を救った戦乙女のような。無限のあこがれであり、何でも出来るだろう、全能の、彼女の神のような。私だけに甘く微笑み、信じ、一番の恩恵を受けている自分に驕り昂ぶっていく姿に、戸惑った。

(……どうしたものか)

C0037、お前の信じる神はこんなにも頼りなくて単純なことさえ出来ずにいるというのに。

——たとえば、メール。

ドイツから用意された居室のデスクに鞆を下ろすと、カツつと硬質な音がして私は肩を落とした。鞆の中にある音源を出して、未送信BOXを確かめる。

『伊藤英』

部屋のガラスの外は薔薇園や噴水が薄暗く見える。朝に散歩でもすると爽やかに朝を迎えられること請け合いだ。気休めの思考をしつつ、ガラスに手を当てると目の前の華やかな光景が信じられないくらい冷たかった。そこに映っている自分をぼんやり眺めると、両足を踏ん張って仁王立ちしているようなりきんだ顔をしている。

「ふふっ」

おかしかつた。今にも泣きだしそうな顔をしているのかと思つたのに、案外私は強いのではないかと錯覚しそうな顔をしている。C0037のこと。日本に残した一夏のこと。これからの私と、あの男のこと。こんなに心配し困っているのに、随分平気そうじゃないか。

自嘲の勢いのまま、ボタンをタッチして文章を打ち込んだ。

『遅くなつてすまない。料理のことで相談したいから空いているときに通信を頼む。』

番号：××××

織斑千冬』

……おかし~~×~~はないはずだ。いや、最後のあれに触れないのは不自然か？ 繰り返し夢でも現実でも思い返しているせいか、一気に頭の中にあの光景が出てきてしまい、私は送信のボタンを勢い良く押した。一週間もこの動作を繰り返しておいて何だが、メールはあっさりと送信された。

(何だ、簡単なこと……)

どつと力が抜けて、椅子に腰を下ろした。きつとあいつのことだから、色々考えて返信してくるだろう。また悩まなければならぬことから解放される。

しかし、てつきり一週間メールをしなければいけない気になつていたが、彼のことをどうでもいいと思つているのならばメールする必要はなかつただろう。では好きかと

言われると、連絡しなくてもいいとほっとしているから違うような。ただ、私は今日日本での騒ぎで疲れているから

「ちーちゃん、っーしんだよお」

取り留めのない思考を遮る声に顔を上げた。外は暗い。何度変更しようと思っても出来なかつた束の着信ボイスが暗いのも気のせいではないだろう。伝えることが不満と言う気持ちとありありと表して、一体どこの誰からの通信チャネル申請かと思いつつ、画面を見る。

『伊藤英』

驚愕で手に力が入り、

「あ」

回線が開く。途端に彼の顔と、

「千冬！」

という声が響いた。……『響いた』というのは文語的表現ではない。

「どうしたんだ、そんな大きい声を出して……連絡が遅くなって、怒っているのか？」

かつてない程、彼が声を張っていたからだ。私の意識を回復させる気付け薬にはなつたが、すぐに心配になる。穏やかな話し方や照れた声色しか聞いてこなかつたのだ。その彼が声を張り上げるだなんて理由は想像するに難くない。すなわち、私の落ち度だ。

「え?!……いや、全然。あの、連絡してくれてものすごく嬉しかった」

急に初めの勢いはどうしたのか、ぼそぼそとした声で言われても信じにくい。

(英はいつも、全力で私のことを慕っていたのに)という不満が出てきて、自分の甘えすぎたところを愕然とする。なんて身勝手。

「その、本当にすまない……」

ただ謝ろうとしただけなのに、ありえないほど沈んだ色がにじむ私に英も困ったのか、静寂が降る。これまで彼との会話で静けさが訪れることなど数あったが、こんなに嫌なものは一つもなかった。沈黙が重さとなり、私の心臓を締め付けだした頃、彼は口を開いた。

「ごめんなさい……」

ぱつと見ると空気中に映し出された彼は泣きそうな顔をしていた。謝ったのは私なのに。

「連絡しづらかったのは、わかるんだ……いつまでも待つつもりで、むしろ、連絡されただけで嬉しくて、でも、僕がキス、しようとしたのは」

混乱し続けているようで必死に気持ちを伝えられる言葉を探そうと空をさまよっていた目がやつと私を捉えた。

「千冬のこと、好きだからです」

二度目だ。

何で苦しそうに言うのか。

何で私は彼にこんな想いをさせているのか。

「嫌な思いさせて、怖がらせてごめん」となおも言い続ける彼を見ていると罪悪感で一杯になる。耐えられないんだ。その場に彼といたなら私は何としてでもその想いをせきとめようとして口をふさぐなり、叩くなりしただろう。でも、今届けられるものは。

「謝るな。私は全然嫌ではなかった……」

私の言葉だ。

予想通りぴたつと彼の口が止まる。

分かっていた。これを言ってしまったからには、引き返せない。次に言う言葉は決まっているのだ。この後で普通の料理やテレビや日常の話題なんて出てくる訳ない。運命のように宿命のように定められた流れが私の中にはあつて、それを悟ってしまった。

私がどう彼を想っているのか、彼とどうなりたいのか、はつきりした形なんていくら探しても出てこない。でも、少なくとも私が今彼とのつながりを失くしたくないという意識だけは堅く存在している。言わなければ彼は二度と連絡しないと断ったはずだ。あるいは私に線を引いたはず。だから、後悔などするはず、ない。

先程とは違う物音のない空間で、私は覚悟を決めた。

「私は英のことが好きだから。

自分でも確信は持てないが、好きだしそばにいてほしい。こんなわがままな私で良ければ、一緒に付き合ってくれ」

茫然としてどこか哀しげにも見える表情の英に言える言葉なんて他にない。

「ありがと……これから、よろしくお願いします……」と目を潤ませてつぶやく恋人にようやく息をついた。愛は育んでいけばいい。彼が言うように、これから、が私たちにはあるのだから。

憂いの一つが取り除かれ、満足した心地を味わいながら、ぐずぐず泣く英をからかった。それから、しばらく次に作る料理の話をして、——彼が「もう開店準備しなきゃ」と気付くまで話し続けた。

誰かを待つ。

久しぶりすぎて忘れていた。幼稚園や小学校のときはわずかにいた友達と学校に行くまでの待ち合わせをしたり約束した時間がきたら電話の前に待機したり。ああいうときはそわそわしていたものだ。楽しみで浮き立つ時間。何かが始まる前。これからへの期待と希望。

だけど、待つときは、絶対に相手が来ると知っていたんだ。

「千冬ちゃんから連絡は？」

「……まだ、です」

「……待つ時間を長く感じるのは仕方がないことよ？」

「……もう1週間ですよ？」

蓮さんが紅茶を飲むがてら目をそらしたのを僕は見逃さなかった。会うたびに聞かれているがだんだんフォローする言葉もおぎなりになってきている気がする。

「千冬ちゃんなら、2、3日で連絡すると思っただけだねえ……まあそれだけ真剣に考

えてるってことか」

何だか食堂よりもおしやれな感じだから、たまには。

自分へのご褒美よね。

そう言つて蓮さんはあのお別れ会以降来てくれるようになった。お昼は忙しいからお客さんの少ない夕方である。僕もあれ以降お客さんの反応が見たくなつた。いきなり一杯の人前というのは厳しいからまず閑散とするこの時間帯からカウンターに出るようにしたけれど。というわけで、必然的に蓮さんと話すのが習慣化していた。

そこで驚いたのが、僕が千冬のことを好きだと知っていたことだつた。「英くん、千冬ちゃんのこと好きでしょ？」と言われた日にはあやうくカップを割りそうになつたものだ。

女の勘らしい。

やつぱり女つて怖いよね。

そこから何故か出会いの話やデートの話までも言わされた。たまに拳を口に当てて顔を赤くしているのは何故だろうか。胡乱な顔をする、「つゝ：楽しい話だなー」と「だつて。あれ、絶対馬鹿にしてると思うんだ。自分がうまく千冬をエスコート出来ただなんてさらさら思つていないけどあんなに爆笑しなくてもいいじゃないか。

ただ、怒ることはあつても、千冬の連絡を待つ間、話が出来る人がいて良かったと心

底思う。

(一人だと耐えられなかった……)

1 週間。

あのときのことを思い出す機会なんて山ほどあった。カップの淵からこぼれそうな程の水にちよつとした衝撃を加えるだけで漏れてしまうのと同じように、ちよつとしたことで僕はあの自分を恨んだり嫌悪したりした。例えば食べ物や物を食べて唇にものが触れるとき。母さんや父さん、蓮さんと話して口の動きが目に入ったとき。ひどいときは風や調理している際出るコンロの熱を感じるときにだって、記憶の窓はたやすく開いて強制的に僕はその光景を見続けさせられる羽目になった。

だからこそ蓮さんには感謝しているんだ。

「……千冬、さんは、僕のこと好きじゃ、ないと思うので」

「そんなことないと思うけど……」

気休めでも、僕のしたことを知らなくても、そうやって励ましてくれる相手は必要だから。僕に何で言葉をかけるべきか戸惑っている蓮さんに「そろそろ、店に戻らないと、ですよね?」と笑う。頷いて鞆を持ち、蓮さんが扉に向かっているときだった。

「おじやまします」

一度聞いたことがある声。

それと続けて

「こんにちは」「コンニチハ」

知らない声が二つ。

「いらつしやいませ」

反射的に挨拶する僕と、

「あら、真耶ちゃんじゃない。そちらのお二人は？」

「仕事の同僚なんです。榊原菜月さんとエドワース・フランシイさんです」

どちらがどちらかなんて、さすがの僕でも分かった。榊原さんというのが生真面目そうな女性の方で、エドワースさんというのが金髪の外国人女性というの当たり前だろう。それよりも仕事の同僚、という方が腑に落ちなかった。真耶さんはもしかすると思ったより年をとっているのかもしれない。……女って分からないな。

「マヤがここの料理が美味しいって言っていたので一緒にさせていただきました」

「五反田蓮です。五反田食堂のウェイトレスなの。こつちにも良ければ来て？安くするわ」

「わあ、ありがとうございます！ぜひ行かせていただきます」

置物のごとくカウンターの隅で固まる僕を気にせず、店先で話し始めた女性陣。

エドワースさんはカナダ出身の数学担当教員。盆栽が趣味の日本文化大好き子。

日本人の彼氏が欲しいそう。

榊原さんはお酒が好きで部活棟の管理を任されている教員。男運がなく、本人曰く「ダメメンズウオーカーなんですよ」。

僕にそんな知識がつくまで彼女らはお互いを紹介しあっていた。よくもまあ、次から次へと話すことが出てくるものだ。この集団が動いたのは、蓮さんが「店に帰らなきゃ」と気づいたのがきっかけだった。

(蓮さん、もうちよつとここにいてください……！)

僕の渾身の頼みのおかげか、「すみません、引き止めてしまつて」「ううん、楽しかったもの」などのキャッチボールは多少続いたがそれも虚しく、赤毛の看板娘はこちらを見て意地悪そうな笑みを浮かべながら扉から出た。

(うわ、こつちきた)

「……メニユーを、どうぞ」

「ありがとうございます」

一般的に料理屋の人はフレンドリーで世間話する人とかコミュニケーション好きな人が多いんだけど、そんなステレオタイプに全く当てはまらない僕はさつと三人にメニユーを出した。話題なんか思い浮かばない。キッチンに引つ込みたい。

「じゃあ、ケーキセットを3つ。私はショートケーキとカフェラテをお願いします」

「胡麻のタルト、熱い抹茶」

「はちみつとレモンのタルトと紅茶のホットで」

「かしこまりました。少々おまちください」

頭の中に注文を叩き入れながらキッチンに引つ込む。繰り返して言ったら同時に口から覚えたことが出ていきそうだし、第一詰まらずに言えるとは思えない。

心に従うのならばここで一息ついて削られた精神力を回復させたいところだが、お客さんを待たせるのは間違っている。おやつの時間にはちよつと遅いし、早めに出さないと夕食が美味しく食べられなくなるだろう。

ケーキにシユガーを振ってソースを辺りに散りばめる。お湯を沸かしたりフロアーサーでミルクを泡立てたりする。やることは多いが小さいキッチンは僕の庭のようなものだ。そこそこ早く準備できたんじゃないだろうか。

「ご注文のセットでございます」

キッチンから出ると三組の目が一身に注がれた。そして空気が華やぐ。

「おいしそー！」

手放して褒めてくれるところを見ると照れもするが……何で女性は食べ物の写真を撮りたがるのか。写真やら食べる前のテンションの上がり具合にハードルを上げられている気分になるんだよ。お前たち綺麗に写ってくれよ、と願いを込めてケーキたちを

眺めていると気づいた。フォークやらスプーン出すの忘れてる。

はっとして顔を上げると、満足そうに自分の撮影した写真を確認し終えた真耶さんと目が合った。

「これ、先生に送っていいですか？」

「え……」

堂々と座り込むケーキ。なかなか良く撮れている。いや、そうじゃないだろ。

質問から逃避しようとする脳を鼓舞して頭を回転させる。

真耶さんが『先生』と呼ぶ人物。僕に言っても通じる共通の知人。

千冬のことだとすぐに分かったが、千冬に真耶さんが写真を送る。多分普通はどこで撮ったんだとか誰が作ったんだとか聞くんじゃないだろうか。そんなときに僕の名前が飛び出す。どすんと散らばるキスの記憶。連絡を取っていない、不相応なことをした相手が彼女の脳裏に過る――。

「その……やめてください……」

千冬はもう僕のことを忘れてどうでもいいかもしれない。そんなこと考えないかもしれない。

それでも、そんな可能性があることに耐えられない。嫌な思いしたり気に病んだりしてほしくないんだ。

「そう、ですか」

失礼のないように口調を和らげたつもりではあったが、これ以上フォローもできずに黙り込む僕らに他の二人が目を向ける。

「ねえ、何の」と口を挟もうとしたエドワースさんにかぶせるようにして真耶さんが「そういうえば、菜月さんの話の続き!」と言わなければ、二人になじられていたかもしれない。これ幸いとスプーン、フォーク、ミルクやシュガーを棚に探しに行く。話の続きなら出る幕はない。

磨き上げられた銀のスプーンが鋭く、そもそも出る気もないだろうと責めるが、無視してカトラリーバスケットの中に入れる。あ、おしぼりも忘れた、とバスケットに入れて込んだときだった。

「デザートはさっき言ったように良かったし楽しかったの。帰りも送ってもらって」

「ジエントルマンね」

「でも急にキスしてこようとしたの!」

「ええ?!大丈夫だったんですか?」

聞く気はなかったし話に加わる気はなかった。けど、彼女たちの声は通っていて簡単に耳に滑り込む。

「未遂よ。だけど家にまで上がってこようとして……はあ」

「ナツキが好きになる相手は毎回気に食わない…納得いかない…うまく言えないけれどそういう相手ばかりよね。その度痛い目見て運命の相手じゃなかったって一人で自棄酒」

「厳しいこと言わないでよ…本当にびっくりしたのよ?」

「あ、あの!結局その男の人とはどうしたんですか?」

気づいたときには会話に参戦していたのだ。だって、無意識だったんだから、仕方がない。言った瞬間合計六の目がこつちにきて早速後悔したけれど、仕方がない。

「もう会わないわ。だって、会って間もなく、よ?怖かったもの」

だって、あまりによく似ている状況だったから、仕方がない。

「その、キスしようとしたのは、あなたが魅力的だったから…かも…」

この人に言っただうなるものでもないが、それでも言い訳せずにはいられなかった。

榊原さんはきよとんとしたが、すぐ笑った。

「ありがとう。口がうまいのね?…その手にあるフォークやおしぼりもらえる?」

「あ、すみません…どうぞで」

(ああ、もう会う気はないんだな)

女の子だったのにいきなり女性らしく会話をそらす姿に、がっかりする。

その後夕飯とお酒まで飲んだ三人(約一名夕飯よりも多いお酒を豪快に飲んだ人もい

たが)は帰っていったが、僕は眠れなかった。

千冬に謝りたい。これまでにない申し訳なきが溢れていた。
ごろごろごろごろごめんごめんごろごろ。

布団の中で何度目か分からない寝返りの最中目を開くとカーテンがほの白く光つていて、明け方まで起きていたのかと驚く。

早く寝なければ昼から店を開けるといえど体力がもたない。

そう思いながら通信機の画面に触れて時間を確認しようとした。すると、軽い電子音と共にメッセージがくる。こんな時間の見知らぬアドレスからのメールなんて、広告だろうと思ひ、けだるい体で枕に肘をつきながら開く。

『遅くなってすまない。料理のことで相談したいから空いているときに通信を頼む。』

番号：X—X

織斑千冬』

最後の文字まで目がいく前にがばつと起き上がる。布団が舞い、カーテンを開けると埃がひらひらと光っていた。そのまま番号を打って通信を申請する。数秒間機械は考えながら電波を届け始めた。

すぐつながり薄暗い部屋に美しいかんばせが浮かぶ。「あ」と目と口を開けた顔だ。かわいい。

「千冬！」

僕は名前を叫んだ。

「どうしたんだ?」

僕は固まった。

(……どうしよう)

完全に何も決めずに連絡をしたものの、言うことをまとめないで通信するって馬鹿じゃないだろうか。というか、千冬からの連絡が嬉しすぎて頭で考える時間も惜しかったんだ……と予測する、多分。でもするべきなことは何で連絡したのか用件を言うべきで、その前に挨拶?

思考が止まっていた分、今となって怒涛の勢いで考えるべき項目が出てきた。再度思考を放棄したい。

「そんな大きい声を出して……連絡が遅くなって、怒っているのか?」

黙っている僕に恐る恐るといった体で千冬が言う。

「え?!」

それこそ驚きだった。怒りなんてどこを探したって存在しない。だが、どこか確信めいた千冬の様子に夕方の榊原さんが言ったことが思い出される。

『怖かったもの』

慌てて興奮で大きくなってしまった声量を落とす。

「……いや、全然。あの、連絡してくれてものすごく嬉しかった」
ああ、何でどうしようもない!

声量を落とすと、恐ろしく声に色がなくなつた。何で本心からの言葉なのにそうは思えないのだろう!

僕の意思を汲み取ってくれることが多い千冬でも気づくことはないようで、「本当にすまない……」と謝らせてしまった。涙腺が緩む。泣くべきなのは千冬なのに情けなかつた。

「ごめんなさい……」

口について出るのはそんな言葉ばかりだった。謝ることは口一つじゃきつと足りない。

じゃあ、一体何を?

怒っていると勘違いさせてしまったこと。

キスしようとしたこと。

怖がらせてしまったこと。

「連絡しづらかつたのは、わかるんだ……いつまでも待つつもりで、むしろ、連絡されただけで嬉しくて、でも、僕がキス、しようとしたのは」

——じゃあ、これは?

「千冬のこと、好きだからです」

それが唯一言えることだった。好きになったことは謝れない。謝る要素がないんだ。身勝手にごめんね……。それ以外だったらいくらでも責められるから。

「謝るな。私は全然嫌ではなかった……」

予想外の言葉に思わず口を止めた。言葉の意味を考えなくちゃ、と思うのだけれど、千冬の文をリピートするだけで思考回路は空回りをし続けている。千冬は追い詰められているように見えた。

「私は英のことが好きだから。自分でも確信は持てないが、好きだしそばにいてほしい。こんなわがままな私で良ければ、一緒に付き合ってくれ」

ああ、あれは重大な選択を迫られた時の間だったのだな、と思う。信じられない。信じられない事態だ。ひどく先ほどのためらいと静寂が気になるが、僕は『本当にそんなんですか?』と聞く勇気がなかった。

恋が叶った。

本当に? 義理じゃなく? その『好き』は優しさとか友愛じゃないの?

でも、たとえ数分後にふられたっていいと思った。

「ありがと…これから、よろしくお願いします…」

今は絶対に千冬は僕の恋人だから。

余計な考えがぼろぼろと涙になって落ちていく。素直に喜ぶために僕は結構泣いた。千冬は「これじゃふられたみたいだな」とからかいながら僕のことを見守っていた。

6 (千冬視点)

「千冬、……本当に、ピザ、好きなんだね」

「……ああ」

英の目が私の背後を素早く通り抜けた。通信機のカメラ映像で見える範囲はそんなに広くはないだろうが、私もつられて後ろを眺める。

今日作る料理のために慣れない買い物をしたせいでキッチンを掃除する時間がなかった、自分で料理を作るのは苦手だから、というのはい訳に聞こえるだろう。私の背後にひっそり佇むダストボックスの横には、赤やら黄色やら自己主張を激しく振りまく宅配ピザの箱がどっしりと鎮座ましましていた。

そつと通信機の角度を調整して私と私の手元しか見えないようにする。

「僕のノート見て、すぐ『ピザが作りたい』って、言ってたし……」

英にしては珍しく呆れ顔である。ただ、それには理由はあるのだ。何が作りたいか聞かれてノートをめくったとき、製作時間が一番長いものを選んだらピザだったから。だからピザが格別好物という訳ではなく、むしろ。

「……まあ、好きだからな」

誰といるのが好ましいだなんて言ってやらないが。

(英なんか、せいぜい勘違いしてればいいんだ)

私は笑い声混じりの英の指示に若干腹を立てつつ強力粉と薄力粉をふるいにかけた。そのままドライイーストというこれまで使ったことのないものを入れる。一人なら絶対に使い切れないし面倒だと思ふ食材だ。英の「料理って遠まわしに作る方が楽しい気がする」と言うセリフに納得しなかつたら、既製品の生地を買おうと提案していたころだ。

時間をかけて、あえて面倒な方法で作る。なんて非効率的でぜいたくな時の使い方だろう！そのことにお互い納得済みで付き合っているということが、お互い少しでも長く一緒に過ごしたいという願いを体現していると感じられて非常に幸せな気分になった。「それで5分くらい、こねるんだ。僕もてつだえればいいんだけど……つかれるだろうけど、がんばって」

「……5分くらい、どうってことない」

(英なんか、)

穏やかな気持ちと思考がびたりと止まる。

体だけは力いっぱい使って白い粉に手を入れた。

女扱いされることにはまだ慣れない。困ってしまう。何よりも、本当にこいつは私の

ことを好きで、今私たちは恋人同士なのだと思えるから。

急に何を話したら良いか分からなくなる。だが、黙っていると胸の奥が痒いようなもどかしい気持ちにさせられて、耐え切れず私は口を開いた。

「……………一夏は元気にしてるか？」

「織斑くんはげんき。バイトもがんばってくれてるよ？」

不思議そうに英は首をかしげた。連絡をしているんじゃないのか、というポーズだ。

「一夏とは毎日連絡を取るようにはしているが……実際に会っている訳じゃないからな」

まさか静寂回避がこの話題の第一の目的だとは言えまい。「心配なんだ」と言葉にすると、微妙に演技臭くなった気がして表面がすべらかな淡い白になった生地に目を落とす。ただそれも一瞬。

「千冬は……………」

途中で止まった声に視線を上げる。

心なしか悲しげな英がそこにいた。「織斑くんが、心配なんだね。いいおねえさんだ」と続けたが、文面とは裏腹に浮かかない表情だ。

「どうした？」

「……………なんでもない、よ」

そんなふうに言われると困ってしまう。彼が俯いて髪の毛がシャッターのように顔を隠した。

「何でもないことはないだろう」と思った通りに口に出す。隠しだてされるのは好きじゃない。ましてや英に隠し事をされるのも、そういう顔をさせるのも、大嫌いなのだ。そんな思いは絶対させない。確信できる愛なんて私にはまだつかめないが、それだけは確かなこと。

「私たちは恋人なんだろう？何でも言えればいい」

「……あまり、気にしなくていいんだけど、その、聞き流してくれればいいんだけど、弟なんだって分かっているんだけど」

「いいから言ってみろ」

遠慮されると腹がたつ。強い口調で言う私に、英は躊躇したあと早口で理由を言った。

「織斑くんには毎日連絡するし心配するって聞いたら嫉妬、したんだと思う」

「……」

今度はこちらが黙る番だった。

「もう、こねるのはいいから、ラップかけて日あたりいい場所に置いてくれる、かな？」

「あ、ああ」

一人そろってぎこちなく動いた。今は作業があるのありがたい。

「次はどうしたら良い？」

「えっと、生地を発酵させるんだ」

「はっこう？」

「生地をそのまま、置くんだ……30分くらい」

「……」

「えっと、トマトソース、その間に作ろう……？」

「あ、ああ」

だが、トマトソースはものの5分程度で出来てしまった。「これで完成だよ」と言われて戸惑ってしまう。

嫉妬されて、好きだと告げて、恋人宣言した。

(本当に恋人同士)

まずい。どつどつと耳元で心臓音が聞こえる。意識するとどうしていいのかわからない。顔に熱が集まらないように祈りを込めつつ布巾で台を拭く。

さつきも話題に困って一夏の話をするとうなずいて。じゃあ、何を話せば無難なのか。長い時間一緒にいたいと思ったのは本当だが、いざとなると平静を装うことだけで精一杯でちよつとしたことで恥ずかしくて逃げ去りたくなる自分が情けない。

「千冬、手際いいね」

「ん？」

「思つたより早く作り終えそう」

ほら、そう言つてまた悲しそうな顔をするから。それでも好きとか感謝の気持ち以外お前は私に言おうとしないから。

「次はいつにする？ ドライイーストなんぞ私一人では使い切れないからな。それを使つた料理が良いな」

恥ずかしくたつて気持ちをお届けるんだ。お前の気持ちが陰ることがないように。

「！次は明後日あたりが空いてるけど、千冬は？」

「私も空いてる。明日に買い物しておけば良いものを教えてくれ」

英は『花のがく』という意味があるそうだ。だが、彼の笑顔はがくではなく、大輪の花がほころぶようだった。

倍にまで膨らんだ白い生地が目に入る。暖かい日の光の中で心地よさそうに大きくなつていた。

私は、流れに従つて彼と恋人になつた。恋なのか、愛なのか、まだはつきりとはしない。ドイツと日本にいる私と彼では実際に会うこともそうそう出来ないし、私の知名度で遊園地、水族館、動物園など普通のデートをすることは困難だろう。

だが、今日みたいに遠回りでものんびり絆を作っていけば私は彼を愛するようになる。この気持ちは時間をとれば膨らんでいく。

(そのときには)

絶対にはつきりと好きだと言おう。その後の彼の笑顔を早く見たい。

私は生地を押しガスを抜きながら、未来に思いを馳せた。

最近の僕には歯止めが効いていない。

「こうして振り返ればドライイーストの袋も3袋目か。私がケーキを焼けるようになるだなんて思ってもみなかったな」

「千冬は覚えがいいし、きちんと分量量るから。今日のも美味しそうだね」

「食べられないのが残念だろう?」

「う……：凶星です」

僕の恋人であるところの黒髪の麗人は、通信機を持つてキッチンからリビングへと移動をした。もう片方の手には一切れのケーキがある。今日のメニューはドイツの定番ケーキであるシュトロイゼルクーヘンだ。余ったケーキは生徒に分けているそうだからやまし過ぎる。

席に着くと、千冬は長い指を丹念に一つ一つ折り曲げて虚空に視線を預けた。

「作ったのは、……：わかっかのケーキに、ドライフルーツやナッツ入りのケーキにさくらんぼジャム入りの揚げケーキ、カスタードクリーム入りのバターケーキ、今日のケーキ」

「クグロフ、シュトレン、ベルリーナー、ビーネンシュティツヒ、今日はシュトロイゼルクーヘン」

「……英はよくすらすら言えるな」

「料理人ですから。千冬は相変わらずケーキの名前言うの苦手だね」

「長すぎるのが悪い」

拗ねたように彼女はスプーンで皿の上に落ちた欠片をつついてケーキの上に戻した。今彼女は5種類のケーキを作れるようになったことになる。

彼女は知らないだろう。

イーストを使い切るため、と言いながらも、僕が彼女にイーストを利用するケーキを作ってもらっている理由は2つあるのだ。それも身勝手な理由が。

「5種類か。まだ作るのか?」

「えっと、きりよく7種類とか?」

「きりよく?」

「……ラツキーセブンってことで」

1つはドイツの言い伝えだ。

古いものだが、イーストを使ったケーキが7種類焼ければ立派な嫁になれると言われているのだ。もちろん、最近ではそんなこと出来ない女性が多い。ただでさえ、女尊男

卑の世の中だ。焼けない女性を責められたものではない。それに千冬は、今でも、良妻になれると思う。けど、験担ぎというか。お嫁さん、つてという言葉にうっかり反応してしまったというか。

「そうか」と腑に落ちない表情を浮かべながら、軽く手を合わせていただきますのポーズをする千冬。

さくつと大きめに切ったシュトロイゼルを口の中に入れて咀嚼している。

イースト生地のカークは出来るまでに時間がかかるから。

これがもう一つの理由だ。生地を膨らませる方法はメレンゲだったりベーキングパウダーだったり色々あるけど段違いに膨らませる所要時間は長い。その分一緒にいられる。

千冬は昼食を一応とつたと言っていたが、お昼前からこのケーキを作り始めていたため空腹もあるのだろう。「太りそうだな」と言いながら、また大きめの塊を口の中に入れた。

「千冬は、もつと太ってもいいと思うけど」

「ふん……まあ、全部は食べないがな。残りは仕事場で配る」

千冬の職場は女性か女の子の割合が多いそうで、ケーキを持って行くと非常に喜ばれるそうだ。

「例の子は、どんな感じ？」

「私が作った物なら食べるようだ」

「……じゃあ、次は栄養あるポトフとか作る？」

例の子とは千冬の教えている子の一人。イースト生地を膨らませている間、色々話をしていた中で、千冬がふと漏らした存在。個人情報のあるだろうから、僕は「あの子」「例の子」と呼んでいる。

彼女は千冬の重い口から聞いた話から察すると、食事は最低限しか取らない拒食症ぎみの少女のようだ。おまけに周りの生徒とコミュニケーションをあまりとらない。ただ、千冬のことを尊敬しているらしく千冬の作った物なら食べるという信奉者……話を聞いた瞬間ウサギの耳のついた女を思い出したが、そのへんは全力で忘れようと思う。あの夜には何もなかった。なかったたら、なかった！

「汁物はさすがに持って行く気になれないな」

「あー……そっか」

「だけど、色々考えてくれて……嬉しい」

「！あ、うん……」

（可愛いなあ）

自己暗示よりも千冬の言葉動作一つの方がよっぽど効果があった。僕の思考回路か

らウサギ女は即時退散し、千冬一色になる。

ぼおつとなる頭ではもちろん良い反応も出てくる訳がなく、千冬も困ったようにまたシウトロイゼルをついばんだ。中に入っている克蘭ベリーが酸っぱかったのか目を細めて口元を引き締める。鮮やかな朱が唇に灯り、その仕草がどうにも僕には、

「英？」

「え、あ、口に」

「ん？……ああ、克蘭ベリーか」

さつと指で辿ると指先には甘い香りのする自然の朱がついていることに気付いたよ
うだ。気恥ずかしげに指を唇につけ、ぴたつと止まり、今度は指先を手近な布巾に伸ば
した。

(近くにいなくて良かった)

布巾に克蘭ベリーが赤黒くついたあたりでようやく僕は暴走する脳内を落ち着け
ることができた。

その手をとって口づけたい。

性懲りもなくキスしたい。

同じ味を共有したい、なんて。

キスしそうになったときのように無意識に僕の体は千冬を求めている。むしろあの

時よりももっと強い衝動を自分の中に感じて、怖いのだ。あんなに後悔して怖がらせてしまったと思つたのにどうしてもそう思うことを止められないのが怖かった。

「そんな目でまじまじ見るな……食べづらいだろう」

「え。ああ、……僕も食べたいな、って」

何をかは言わないけれど。

笑いながら通信機に見せつけるようにシュトロイゼルのついたフオークをちらつかせた。そつちじゃないんだけどなあ。

（ああ、歯止めが効かないな）

今はドイツと日本の距離があるから大丈夫だけれど。

そう思っていた僕は千冬の次の言葉に瞠目した。

「今週、日本に帰れるようになった。一緒にどこか行かないか?」

「えー!」

「一夏とも会いたいから悪いが月曜の昼から、…夜にかけて。…嫉妬するなよ?」

「し、てない!……今のところ、嬉しいだけ。いつ、どこで、会えそう?」

会う時間、場所を決めて、通信を閉じた。行く先は僕が決めることになっている。目を閉じてゆつくりと考える。今でさえ見ただけで抑えきれない感情がある。

（自制しないと）

人目があるところに行くこと。二人きりにならないこと。……しっかり対処してデートに臨もう。

解明【Your name is...】

7 (千冬視点)

マスク越しでも分かる湿度の高い空気を感じながら、私は日本に降り立った。それが一昨日のこと。

出来る限り早くと思つて一夏の元に行ったが、保護施設に一夏がいなくて焦つたことは記憶に新しい。ただ、まだ金曜日で学校に一夏は帰宅していないだけだと気づいて苦笑したことも。

帰つてきた一夏に「おかえり」と言えたことも。

一夏が目を丸くしながらも嬉しそうに「ただいま」と言つたことも。

その日と土曜日は一緒にのんびりと過ごした。

蓮さんたちと「久しぶり」と挨拶をして日曜日を家族団らんで過ごし、朝に一夏を学校に「行ってこい」と送り出し――。

そして、月曜日11時、着替え。

12時、家を出る。

そして今、駅。

人目が多い駅だが、英がどうしても言うから来たのだ。当初私のことを知る者がいるかもしれないと恐れていたが、人がここまで多いと分らないのか、変装のためのマスクと髪型を変えているせいかな、案外私だとバレないようであった。少なくとも一般人には。嬉しい誤算である。

しかしながら、全てが完璧という訳にはいかないようだ。

(これから『恋人』と初めて会うというのに)

首筋に違和感がある。サイドにゆるく編んだ髪の毛があたっているからではない。

(見られている)

好奇。興味。

そんな生温い視線ではないもの。

舌打ちしたい思いに駆られながらも黒目を動かさないように周囲に視線を走らせた。

いる。どこぞの諜報員か政府関係者か知らんが舐めた真似をしている奴らが、いる。

しかも、防犯カメラまで私の動きに反応して数台傾きを変えたところを見ると、……

この駅はもう駄目だな。英にここで会うのも危険だ。移動しなければ。

そうと決めたら早い。人ごみとカメラの死角を縫うようにして走る。後ろで監視していた奴らが人にぶつかり距離が離れていく気配がした。こんなにたくさん人が歩いていてもカメラがあつたとしてもISの戦闘に慣れきつた私からすれば、人と人との間

は広く、緩慢に見えるものだ。カメラも動きが遅く、範囲も狭い。

角を曲がったところで改札口からゆっくりと出てくる男が見えた。

(いた！)

良いタイミングだ。

彼の家の最寄り駅からこの駅に着くとここから出てくると分かっていたから、という

言葉で片付けるな。

運命とでも言え。

右足を大きく踏み出し、左足踵を捻り、思い切り右足で地面を蹴る。

体が浮く。

緩い三つ編みが続いて宙に舞った。

勢いのまま彼の肩をつかんだ。

「英」

「え」

大きく目を見開く彼に笑いかける。ああ、マスクをつけていた。笑っても気づかれな
いだろうな、と思うと、彼もマスクをつけていた。それでも彼が笑っていることが分
かった。瞳がきらきら輝いて弓型に曲がる。仏頂面と思える私の顔も今このとき笑顔
だと彼に分かつてもらえればいいと思う。

残念ながら、笑顔を見る時間も悠長にこの場で話す時間もないが。

「ちふ「黙ってついてこい」」

喜色満面に話しかける英を遮って走る。

「え、え?!」

後ろから彼の困惑、さらに後ろに私を探す焦燥の気配を感じた。私のようにうまく人を避けられない彼はこけそうになったり離れそうになったりしつつ必死で私の後をついて来ている。あぶなつかしくて見ていられん。彼の方を振り返り左手を出した。

「手をー」

私としては手を引いて走るつもりだった。

だが。

「は、い……っ!」

息を切らして差し出されたのは、彼の右手、——と彼の左手。

「ふふっ……!」

何故、両手なんだ。

こんなときなのに笑いがこらえきれなくなつた。

「……そうだな」

離れていた期間が長いのだ。

片手じゃ足りない。

それに、普通のカップルのように指を絡めるよりも、いじらしい女のように数本の指だけを持つ繋がりよりも、この方がずっと私たちらしい！

両の手を掴んで彼の体をぐつと引き寄せた。

「え、え!!」

そのまま踊るように彼と人ごみの間を縫う。彼が左によるめけば左に、右に倒れかければ右に。ステップは不規則。リズムはアップテンポ。踊ると比喻するにはおこがましいほど優美さのない動きだったが、一体感があった。

楽しい！

だが。

「何あのカップル??」「駅中でダンス??」「すげー」「新手のパフォーマンズ??」

いかん、人目を引きすぎたな。

入口近くに駐車していた車に飛び乗り、英が乗り込んだのを確認してその場を離れた。

「ち、千冬、どうしてあんな…」

「ああ…その、邪魔者がいたから、な」

「…ああ!」

さすが我が恋人。それだけで彼は分かってくれたらしい。デートに尾行者や監視人がいるのは無粋だからな。

にしても目立ちすぎた。どうやら私はとんでもなく浮かれていたようだ。

その原因はシートベルトをつけようと隣で四苦八苦している。息が切れているせいで指先が上下し、金具の部分が留め金に合わずカチカチとリズムを打っていた。

「ふっ。焦るな、英」

「し、シートベルトしないと、法律違反……でしょ……千冬、もう出発してるし……」

金具が合わさる音がして、英が隣で息を吐いた。どうやらベルトをやつこのことで装着したようだ。

「それで？これからどこに行く予定なんだ？」

「あ、まず、ここから200メートル先の交差点を左に……じゃなくて！」

信号が赤になり、緩やかに車を停めた。

行先をあくまで言おうとせず、道案内をしようとする隣の男に目を向ける。道が分からないなら、おとなしく目的地を言えばいいのにな。

「なんだ？道が分からないのか？」

「何回も確認したんだから分かるよ。じゃなくて」

さらっと嬉しいことを言うと、恋人は私を見て微笑む。

「おかえり、千冬」

気恥ずかしげに「本当は一番に言いたかったんだけど、それは織斑君に譲ってるから」と彼は言う。

振り返る。一夏には「ただいま」としか言われてないし、私が迎え入れる側だった。蓮さんたちには「久しぶりね!」と言われた。

ということとは。

「……お前が一番だ」

「え」

「『おかえり』と言ったのは」

私は「あー。そうか。そうだね」と繰り返して言う彼から目を離してブレーキペダルから足を浮かす。

信号は青になっていた。

「交差点を左に行ったらどうするんだ？」

「え?…あ!えーと、次は400メートル先に……」

こと細かく道案内をする彼の声を聴きながら胸の中で『おかえり』の言葉を大切にしまう。

ここは、英のいる場所は、私が帰ってくる場所なんだな。

「ん、了解」

車を走らせながらこの後行くデートコースにわくわくした。

10

アクリルトンネルの中身が発光する。真つ暗な中、色とりどりの熱帯魚がその尾を揺らめかせる。

真つ暗で危ないため、この水族館では一緒に来館した者は伸びているロープあるいは手すりを持つように入り口で言われている。とはいえど、ぼんやりとした青い光の中彼女の顔はくつきり見えている。

「きれいだ…」

「そうだな…美しい…」

千冬を見ながら僕は思う。ここに来て良かった。

意を決して来た自分セレクトの水族館に大満足する。たとえ見るものが違っても同じ感性を抱けるのは素敵なことだし、何より彼女のことを直接見られるなんて何ヶ月ぶりなことやら。

さつきまで駅を駆け回ったり車を懸命に誘導したりで顔をしっかりと見る機会がなかった。どうやら駅で千冬はストーカーに行き会ったらしい。駅にいるときマスクをしていたのはこういったストーカーを撒く変装のためだろう。僕にいたっては人と同

じ空気を吸うのが無理だったってだけなただけ。お揃いだったからよし。

車中で聞く限り、自分を追う奴がいた、だからバタバタしていたそう。不思議の国のアリスから現実世界に沸いて出たウサギ女の姿が脳裏によぎる。アンタ、デートのお邪魔ムシなんだってさ。と、心の中でほくそ笑んだ。

独占欲丸出しである。

その対象の千冬の瞳は暗い中碧眼になり、魚がその小さな中に泳いでいる。

(この姿を収めたい)

ここは写真撮影禁止だけど、外なら出来る。ただ、明るい日の下で、他人の顔を大量にくっつきり見えるような外で、彼女の写真を撮る僕って――

『はい、笑って笑って！はい、次はこっちに視線を』

機敏な動きで上に下にアップに引きにあらゆる角度で欲望のままシャッターを切りまくる僕。光るフラッシュ。連写。くるりと身を翻す千冬。その姿は水面を自在に泳ぐ熱帯魚よりも輝いている。跳ね飛ぶ無数の魚。舞い踊る飛沫。軽やかに笑う彼女を見て僕は良い仕事している人の顔だが、一方その姿は完全にグラビア写真家……うん、そうじゃないよね、不審者だよ。

「英、手を出せ」

「は、はい！」

ぼうつとしていた僕は慌てて駆みたいに両手を差し出す。

いつの間にか出口に近づいていたらしく薄明るくなっていた。

人が少ないためか、要らないと思つたのか、彼女はマスクをはずしていた。表情がはつきり見える。僕もつられてマスクをはずした。彼女と同じが良い。

千冬は光を背負つて笑つていた。そして、俺に向かつて手を差し出し、

「落とすなよ？」

「は、はい……え？」

次に触れたのは冷たく肌に吸い付くような——星型の、生き物。

「……ッ……ッ！」

声にならない叫びを上げながら、息だけひゅつと吸い込んだ。ごつごつした突起があつてふにやふにやでも硬くもない微妙な感触の、そう、例えるならば濡れて使い古した革のようなこの水族館の人気者。

「ヒトデに触れるらしいな。珍しい水族館だ」

千冬はにっこり笑顔である。

僕も顔の筋肉がつりそうなほど引きつらせながら何とか笑顔を作る。

「英？久々に恋人と会つたのに、ぼんやりしていただろう？」

首を傾けて目を細めながらひよいとヒトデをつかむ。そのままヒトデは僕の顔前で

何度か行き来する。僕は作り笑顔のまま微動だにしない。というか、できない。「罰だ」

再度手に星が帰ってくる。

「その水槽に返しといてくれ。それが終わったら」

彼女は出口に向かつていくと風がカーデイガンと髪の毛をこちらに流した。

「あつちの方で写真とろう?」

千冬の方に僕の心も魂も何もかも向かっている、と感じた。何はともあれ彼女のことを言葉で言い表すことは、僕にはできない。やはり僕の恋人は、最愛で、美しいとだけ思った。

「あの…英…?」

「は、はい!」

一瞬理性が飛んでいたようです。いつの間にか僕はカメラ片手に千冬の前にいた。

「あ、ごめん」

「1つ聞いておくれが、そのカメラ何が映っている?」

デジカメの撮影画面をのぞく。天使の輪が輝く黒髪。綺麗な顔に今は苦笑いを乗せている彼女が見える。

「え?千冬」

「他には?」

他?彼女の後ろのわずかな空間に見えるものといったら、

「空」

「……英」

顔に苦笑いではない笑みがのぞいた。ぼんやりとした幽霊みたいなもので、よく見ようと目をこらしたら消えしまっていた。今は代わりに唇を引き締めている彼女が見える。惜しいシャツターチャンスを逃したが、まだ頬に朱色が灯っている姿も欲しい。僕はもう一回シャツターボタンを押した。

「英!」

「は、はい!」

彼女が腕に勢い良く飛びついた。驚きで離れたデジカメがふわつと宙に浮き、僕は口を開けてカメラが落ちる軌跡を見つめる。カメラがもう1度光を放った。

「手を出せ」

「?」

千冬は呆然としている僕にカメラを手渡した。画面にはぼつちりレンズを見上げて笑う千冬と——目を見開いて手を伸ばしている間抜けな僕。ツーショット。僕はそつとカメラを握り締める。

「千冬」

「何だ？」

「現像してドイツに送るよ」

「…その写真だけでいいからな」

他の写真は要らない、と言いながら彼女は横からカメラを覗き込み、「変な顔。次は私の彼氏としてキメ顔で頼むぞ」と笑った。

僕も笑うと薄暗い館内の中で夕方まで過ごし、そこから近くの灯台に行った。

夕日が沈みかけていて、海がオレンジ色に煌いている。

船が数台港に向かっていくのが見えた。

「もうちょっと暗かったら夜空が綺麗に見えるらしいんだけど」

「すまん。飛行機の時間があるから……」

「残念」

悲しげに言う彼女の瞳も橙色に照らされている。そんなこと分かっていた。フライトの時間を聞いたときから星空は見る事が出来ないだなんて。確かに残念だけど僕はそれでいい。次に会う理由が出来るから。

「また、来ない？今度は、…星が、うじゃうじゃしているところ、見ようよ」

千冬は僕の誘い文句に堪え切れないとばかりに「ぶっ……」と噴出した。失礼な反応

だ。

「うじやうじや……ロマンチックな誘い文句だな。ははっ」

「あんまり笑うんだったら、弁当渡さないよ?」

「それは困る。……っふっふ」

彼女なら分かっていてと思うのだが、僕は今回も弁当を作っていた。海で使ったバスケットをふらんと目の前で揺らした。ヒトデのお返しのもりだったが、彼女は困ったとは言いながらあまり困っていないふうである。

「せっかく水族館にちなんで海鮮弁当作ったのに」

「ん?」

「今日見たタコとかイカとか魚を使ってるのに……」

情けなかがろうが、意趣返しをしてやろうと泣き真似をすると「そこは、実際の魚介類じゃなくてタコさんウインナーにするとか、イカさんウインナーにするとかあるだろうに」と彼女は微妙な顔をした。さらに恨みがましい目で見ると若干棒読みで「あー、ぜひ食べたいな。英、許してくれないか」と言った。

「仕方がない。空港に着いたら渡すね」

「?今渡さないのか?」

「荷物は僕が持つって」

千冬に重い物とか持たせたくないのは男としての矜持だ。どこかしらまた照れたように黙り込む彼女を見て、手が出そうになるのを抑えるためにも、バスケットで手をふさぐ必要がある。

……僕だって、こんなムード満点なところでわざわざ色気無い表現を使ったり弁当の話なんてしない。わざわざ人のいる水族館を選んだのだって、千冬と一緒にいたら歯止めが効かない僕に対する抑止効果を期待してのことだ。

「そろそろ空港に行こう」

だから、そんな名残惜しげな顔をしないでよ、千冬。

バスケットの持ち手がきしむ。

■

僕たちはまた車に乗り込み、空港まで行った。

彼女はマスクをつけている。あのウサギを警戒してだろうか。忌々しい。

「千冬、もし変な奴が出て守るから」

「あ、ああ」

何だか千冬がひどく驚いているが、構わない。僕は確かに頼りがいがないし、どうしようもない男だけど好きな人を守る気概くらいあるのにね。……どうせなら千冬から『守って』とか聞きたいけど。

「英？あの、どうしたんだ？」

あまりにじつと見ていたせいか、千冬が戸惑いながら聞いてくる。

「千冬は、何か困ったことない？」

「え……」

「困ったことあつたら、言つて。解決、までは出来ないかもしれないけど、頑張るから」
彼女は口をつぐんだ。強くて凜としているように見える彼女だから、あまり人に頼つた経験がない可能性がある。けれど、僕はそんな彼女に頼られる特別な存在になりたい。それは好きっていう感情の次に溢れてきた。僕は名前のおとり、花卉を支えるがくのように人を支えられる人間になりたい。出来れば支える人間は彼女が良い。

「教え子に」

悩んだように彼女は口を開いた。僕は首を傾げる。『教え子』？

「あまり食事を摂らない娘がいるんだ。もう話したことはあるな。良ければ——料理を教えるときに同席させてもいいか。それで、一緒に料理させてほしい。私がいたら食べるんだ、あの、子は。自分で食事を作るようになれば、その、ちゃんとご飯を食べるようになるかもしれないし、娘の名前を言うことが出来ないのだが」

「お、教える」

ためらいがちに言う必要はない。彼女からの頼みに僕が応じないわけがないのだか

ら。とはいえ、ストーカー話じゃなくて驚きのあまり反応は鈍かった僕に、彼女はうつむく。

「こんなお願いをして悪い」

「いや、そんな！むしろ頼ってくれて嬉しい」

空港のターミナルに行き交う人々が振り向かないか心配だ。だって、彼女はこんなに綺麗に笑っている。マスクなんかで隠しようがないくらい。彼女は首筋に手を当てながらぼそっと

「一夏のときみみたいにはならないんだな」

とつぶやいた。どういう意味か分からないから、「え？織斑くん？」と聞くと、先ほどよりもためらいがちに口を開いた。

「あの、私と二人で話す時間は減るわけだから、教え子に嫉妬したり、…嫌がったりするかと…思つて……」

言つた先からうつむく。教え子さんが女の子だからか感じなかつたけれど、そう言えば前は織斑くんに毎日連絡するつて聞いただけで嫉妬したよ。嫉妬するのは、迷惑じゃないのかと思つてた。でも僕の願望かもしれないけれどどうつむく前に垣間見た彼女の表情は残念そうに見えたような――

「して欲しかったの？」

気がつくとは僕はそう聞いていた。いつそ無神経なまでにストレートに聞いていた。

これ以上彼女は下を向きようがないくらい顔を伏せる。長い髪がざらりと滑り落ちて、真つ赤な耳が現れる。

「な……?! え、あ、その」

ダメだ。

そう考えた。喧騒の音も千冬の声も途切れる。理性が引きちぎれる、ぱたんという音が聞こえた。ん？これはバスケットが落ちた音か。

「英、弁当が……」

手を伸ばした彼女の手をすくい取る。

今はそんな物どうでもいいんだよ。だからこつちを見て？

力を入れて引つ張った訳じゃないが、彼女はこちらに向かつてよろめいた。彼女は僕の胸に手を付き、さらに勢いを殺しきれずに体も僕に預ける。かがんでいたせいでバランスが取れなかったとか、そう考えることはなかった。彼女が自分から飛び込んできたように感じた。都合の良い妄想だ。頬に当たる髪の毛がくすぐったい。

「はは……」

我ながら濁いた笑いだ。僕がやろうとすることは間違っている。今日一日避けようとしてきて努力してきたことなのに、最後の別れのときで、僕を止めるものは何もない。

かった。既に彼女との距離はなかった。間違えたことをしているのに、心の底から喜んで
いる僕は、おかしいよね。

「いっにおい」

腰に腕を回してさらに強く引き寄せた。びくりとはねた彼女が愛おしくて、つむじに
まず唇を落とす。そのまま彼女の腕をつかんでいた手を離して落ちている髪の毛をか
きあげる。

「あ……」

意志の強さを表すような眉にキスをして、その下の固く閉じられたまぶたにもキスを
する。

僕は目を閉じて、彼女の顔を上に向ける。一番したいところにキスをしやすくするた
めに。そして唇を目当てのところに押し当ててその姿勢で――

「……………」

固まった。

温かい。柔らかい。息苦しい。何だか甘い気がする。

けど、けど。

「いっ、いっ、いっ……ちふゆ……」

「は、はなぶさー！おまえ……!!」

千冬、マスクしたままだったよね。

空港にドイツ行きの飛行機のアナウンスが響き渡る中、僕たちは抱き合った姿勢でカチンコチンに固まった。僕は千冬にされたこと、千冬は僕にされたことについて、頭の中でリフレインしながら、ああ、もう飛行機が出ると考える。

「千冬」

僕は断腸の思いで彼女に回していた腕を離し、からからの喉でその名を呼ぶ。

「か、帰る」

「い、いつてらっしやい」

「あ、ああ」

千冬はだつと走り出す。もう時間がない。だが、何を思ったか、帰ってきた。

素早く僕の肩に手を置き、少し背をそらして一瞬マスクを取る。

頬に暖かな感触と小さな皮膚を吸う音が聞こえた。

「い、いってくる！」

彼女は落ちていたバスケットを拾うときびすを返した。

後には頬を押さえて呆然とする僕を残して、彼女はこうして日本を去ったのだった。